
桜の刻

ShellieMay

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の刻

【著者名】

Shelbie May

【Zコード】

N6054M

【あらすじ】

巴探偵社所長 西園寺歳文は、ある誘拐事件で市村桜と出会う。

彼等の浅からぬ運命とは？

桜の懐中時計に秘められた想いとは？

序章（前書き）

探偵物を書いているつもりが、気が付けば恋愛小説！？（汗）歴史上の人物や出来事が出て来ますが、あくまでフィクションですので、曲げちゃう所は思い切り曲げちゃってます。ご容赦下さい。

序章

花が舞う。

今年も桜の花が舞う。

ああ、あの時と同じ満開の花。

あなたと過ごした、あの季節を思い出す様に一陣の風が花びらを舞い上げる。

楽しいばかりではなかつた。

むしろ、苦しい思いが多かつた。

それでも確かに光る、短く淡く儂い想いがあつた。

桜の花にも似た、花びらの嵐の様な一瞬が…。

今度こそ、あの人に会える？

本当に？

その人と瞳を交わした刹那、私には感じる物が確かにあつた。

「信じよう。」

一人呟いて、私は歩み始めた。

第1章 （1）

その女性を初めて見たのは、岩崎邸の居間だった。

岩崎氏の長男清志君が誘拐され、犯人より身の代金の受け渡しの書簡が投げ込まれたのだ。

そこで我々、巴探偵社に依頼が舞い込み、岩崎邸の全員を居間に集めたのだ。

「それで、警察に連絡は入れられたのですか？」

この男は、藤田剛。冷静沈着で度胸もある、信頼出来る俺の片腕だ。「いえ、警察にはちょっと…。出来れば、あなたの方の手で解決して頂きたいと…。」

テーブルの上には俺の、『巴探偵社 所長 西園寺歳文』と書かれた名刺が置かれている。

その名刺を弄りながら、汗を拭き拭き、岩崎氏が説明する。探られると、不味い事でもあるのだろう。

其れにしても、我が子の命よりも、己の対面か。

「犯人に、心当たりは？」

「それは…。」

有り過ぎて、分からぬといつた所か。

応接セツトには我々の他、慄然とした本妻と、泣き崩れる妾である母親が座る。

「承知しました。それでは、私共で全て対処させて頂きます。」

「ちょっと待てよ、藤田。この脅迫状には、身の代金は女が持つて来いと書いてあるんだぜ。」

そう声を掛けたのは、川崎真吾。腕と度胸は人一倍の、俺の腐れ縁の幼なじみだ。

「所長、如何いたしましょ？？」

「そうだな、うちには女性捜査員は居ない事だし、こっちで誰かに

出て貰うしかねえんじゃねえか?」

部屋に集まつた者達が、一斉にざわめく。

「あたくしは、嫌ですわよ!」

本妻が、汚らわしいとでもいう様に、ハンカチーフで口元を押さえながら言い放つた。

「わ、私が…私が…」

と、母親が岩崎氏に懇願する。

「申し訳ありませんが、貴女には無理でしょう。とても冷静な行動はどれそうに無い。」

そう説く藤田に、力無く頭を垂れる母親。

「誰か、清志の為に行つてはくれないかね?」

再びざわめく室内。

岩崎氏は、10人程いる女中の一人一人の顔を見た。

「お願い…どうか、清志を、清志を…」

母親も泣きながら、懇願する。

気まずく押し黙る女中達。

「だから、女性捜査員置こうって言つたじゃねーか。」

「今此処でその様な事を言つても始まらん。」

「さて、どうしたもんか…」

と、俺が腕を組んだ時、

「あの…、私が参りましょうか?」

後列端にいた女中が、名乗りを上げた。

再びざわめく室内。

「行つてくれるかね?」

岩崎氏は、女中に走り寄り手を握り締めた。

年の頃は20歳そこそこ。

取り立てて言う程の美人では無いが、大きな瞳が印象的な娘だ。

「いいのか?身に危険な事が及ぶかもしけれねえんだぞ。」

「はい。」

そう答えた、曇りの無い真つ直ぐな瞳。

「分かった、それじゃあんたに頼もう。岩崎さん、金の準備を頼みます。」

「分かりました。明日の昼までには。」

受け渡しは、明日夕方6時。

それまでに俺達は準備をしなければ…。

「それでは、また明日伺います。」

岩崎氏と打ち合わせを済ませ邸を出る時、玄関まで見送りをたその女中に俺は答つた。

「あんた、名前は？」

「…市村…市村桜と申します。」

そう答えると、また真っ直ぐに瞳を返した。

「さてと、どう思う？」

車のハンドルを切りながら川崎が訪ねる。

「商売絡みなのか、ただの金目的なのか、どちらにしても犯人の詐索無用つてのが気にいらねえ。」

「一応探つてみるか？」

「ああ、頼む。」

「あいよ。」

面白い遊びを見つけた様に、真吾は鼻歌混じりにハンドルを操った。

「所長、内部に手引きした者の疑いも捨て切れぬのでは？」

「あの本妻か？あれにゃ、そんな度胸ねえよ。」

「では、雇用人は？」

あの場で見る限り、怪しい素振りを見せた者は居なかつた。

「あの娘は？」

「ああ、可愛かつたよな？あの娘。俺、あの洋装の女中つて好きなんだよ。」

「あれは、ハウスメイドというのだ。」

「へえ、よく知つてんなあ、藤田。」

「常識だ。」

危険と知りつつ名乗りを上げるのは、見上げた忠誠心だと思つが、彼女の反応は確かに符に落ちない点もあった。

声に…あの瞳…曇りは無かつたが…。

「どう思つ、藤田。」

「あの対応、一介のメイドにしては、肝が据わり過ぎかと…。」

「さうか…。彼女に関しては、その場の行動如何で対処する事にしよう。」

「了解しました。」

俺達の「巴探偵社」は、上野にある。

途中、調べ事のある真吾を下ろし、藤田の運転で俺達は戻つて来た。以前は、英國の貿易商が使つていた自宅兼事務所は、全てが西洋風な佇まいだ。

ドアに取り付けてあるベルが鳴ると、しばらくして割烹着を着たキヨが顔を出した。

「お帰りなさいまし、坊ちゃん。」

「ああ、今戻つた。」

「只今、戻りました。」

キヨは俺の乳母で、齢60を越している。

男ばかりが住むこの館の一切を取り仕切つているが、最近歳のせいか時々辛そうだ。

何度も女中を雇つてみたが、この館にはどうも長居が出来ない様だ。キヨに原因が有る訳では無い。

原因は、男共に有るのだが、それは致し方ない。

「それでは、明日の準備を…」

それから、俺達は準備に追われた。

その間も、ふとした事でもたげる彼女の顔。

何故気になる？

名乗りを上げたからか？

以前、どこかで見かけたか？

しかし、記憶の糸を手繰り寄せて、その顔は出て来なかつた。

翌日、昼過ぎに岩崎邸に出向く。

岩崎氏は、約束通り金を用意し、旅行鞄に詰めてあつた。

市村桜は、真吾が期待したメイド姿では無く、グレーのツィードのワンピーススースを着ていた。

恐れる様子も無く、慌てる様子も無く、静かなものだ。

時間が迫り、俺達は車に乗り込む。

取引場所の廃工場は、ここから車で一時間程の所にある。

乗り込むなり、藤田は、彼女に探りを入れ始める。

出身地、以前の勤め先、岩崎邸に雇用された経路、どれを取つても不自然な所は無い。

ただ一点を除いては。

「お前、恐ろしくは無いのか？」

「はい？」

また、真つ直ぐに見つめられ、俺の方が視線を外した。

「今から行く場所には、命の遣り取りがあるかもしけねえ。銃だつて、ぶつ放されるかもしけねえんだぞ。」

「そうですね……。」

そこで初めて、彼女は視線を落とした。

「怖くはねえのか？」

「全く怖く無いと言つたら、嘘になります。でも、皆さんの事を信じていますから。」

真吾がヒューと口笛をならし

「いいねえ、信じてる。いい響きだ！俺は好きだぜ。」

と、喜ぶ。

驚いて目を見開く、後の二人。

先に口を開いたのは、藤田だった。

「何故、初めて会った俺達に向かい、信じていると言える？何を根拠に…」

いつも冷静な藤田が、いつになく狼狽えている。

「さあ、何故でしようねえ？」その様子が可笑しかったのか、彼女も笑いだす。

運転席では、真吾が大爆笑していた。

俺は、苦虫を噛み碎いたように一人ごちた。

「お前等あ、氣い引き締めて行けよ！」

廃工場に着いた時には、辺りは夕闇が迫っていた。

市村桜を指定された工場の中央に立たせ、俺達は打ち合わせた位置に配置を完了する。

ほどなくして、車の止まる音が。1台？いや2台か。

猿ぐつわを填められた少年を囮む様に、3人の男達が現れた。

男達の手には銃が握られ、その内の一丁は少年に向かられている。

「金は？」

「ここにあります。」

「見せる！」

彼女は旅行鞄を開け、中の札束を見せる。

「よし、持つて来い！」

「坊ちやまを離して下さい！」

「何だと？」

気色ばむ犯人に、彼女は毅然として言い放つ。

「坊ちやまを、離して下さい！」

リーダー格の男が隣の男に顎をしゃくつて指示を出す。

指示された体の大きな男は、太い腕で少年の肩を掴み、銃を突き付

けたまま彼女の元までやつて來た。

彼女は、犯人を睨み付けたまま少年を奪い、素早く猿ぐつわを解いてやる。

「…ひ、さくらあ、さくらあ…！」

「大丈夫ですよ、坊ちゃん。よく頑張りましたね！どこのお怪我はありませんか？」

少年は被りを振りながら、彼女にしがみついて泣きじやぐる。不意に、少年を抱きしめていた彼女を、男が後ろから羽交い締めにする。

「冗貴い、こんなに簡単に金が取れるなら、この女とガキで、もつと金引き出せるんじやねーか？」

「止めておけ。」

しかし、大きな男はそれを無視して、

「それにこの女、ちょっと可愛いしよお。俺好みだ。」

そういうと、彼女を床に組み敷いてしまつ。

彼女の名を呼び続け泣きじやぐる少年に、

「坊ちやま、逃げて下さい！」

そう、抵抗しながら彼女は叫ぶ。

こういう展開になるとは、迂闊だった。

俺は、離れた位置に居る藤田に指示を出し、リーダー格の男達の対処に当たらせ、床に転がる一人の所に走る。

「おい、何やつてんだ？」

そう言つと、男ね体を蹴り上げて彼女を救出す。

彼女は素早くその場を離れ、少年と壁際に引いた。

「何だ、テメエは？！」

向けられた銃を蹴り飛ばし、俺はそいつの眉間に銃口を当てる。

「大人しく金だけ持つてかかるなら、見逃してやろうと思つていたのによ。」

「ほう、そうなのか？」「

不意に背後で、撃鐵の上がる音と共に男の声が聞こえた。

「くつ！」

新手か？

此方は3人、相手は4人、どうする？

その時、

「動かないで！」

彼女が叫ぶ。

少年を後ろに庇い、さつき俺が蹴り飛ばした銃を構えて、新手の男の背後から狙いを定めていた。

「ほう？」

新手の男は、銃を構えたまま振り返り、彼女に迫る。

まずい！ 彼女の元に向かおうとした俺を、大男が阻む。

「逃げろ！」

じりじりと追い詰める男の顔が月明かりに照らされる。

「叔父さん！」

「高明様！」

少年と彼女が叫ぶのは、同時だった。

藤田が睨んだ通り、内部に手引きする者が居たか。

「何故です？」 しばらくの沈黙の後、銃を構えたまま彼女は問う。

「何故かだと？ 清志、強欲なお前の父親は、全てを自分の物にして、身内である俺でさえ切り捨てようとしたのだ。俺の事業も、お前の父親にことごとく邪魔をされてしまったのだよ。」

「でも…それでも、坊ちゃんを誘拐していい理由にはなりません！」

「言ひな、小娘。お前、あの家の使用人か。女の身で銃など、止めておけ。お前に扱える代物では無い。」

そう言つて、高明と呼ばれた人物が近づこうとした時

『ガーン』

彼女の銃口が火を噴いた。

その場の全員が固まる。

高明の足下から煙が上がつていた。

「お前っ！」

明らかに焦りを表した高明に、彼女は目の前まで詰め寄り、銃口を胸に押し当たった。

「ここの距離なら、外しません。」

「くそつ！」

高明も彼女に銃を突き付けた。

「そこまでだ！ 高明さんよお、俺達はあなたの兄さんから、犯人の詮索無用って言われて来てるんだ。あんたが此処で引くな、俺達は何も無かつた事に出来る。しかし、これ以上事を起こすなら、それ相応の覚悟をしてもらわなきゃならねえ。」

しばらくの沈黙。

彼女と高明の対峙は続く。

「どうするよ、高明さん？」

不意にガツと音がして、彼女が崩れ落ちる。

高明が銃尻で、彼女のこめかみを殴りつけたのだ。
そして、

「お前達、引き上げるぞ！」

そう言つと、忌々しげに金も取らずに仲間を連れて引き上げてゆく。

「大丈夫か？ 嬢ちゃん？！」

真吾が彼女を抱え起こす。

痛みと目眩で顔をしかめながら、彼女が最初に吐いた言葉は、

「坊ちゃんは？」

だった。

「大丈夫だ。緊張の為、氣を失っているがな。」

清志を抱きかかえた藤田が答えると、彼女は安心した様に

「良かつた…」

と呟いて笑つた。

「全く無茶しやがつて！ 殺されるかもしけなかつたんだぞ…」「で

も、助けて下さつたでしょ？」

「ぐつ！」

ちげーねえと笑う真吾を睨み付け、俺達も廃工場を後にした。

第1章（2）

車に乗り込んだ俺達は、一路若崎邸を目指す。

藤田は助手席に移り、後部座席には俺と疲れて寝てしまった清志、そして清志に膝枕をし、その髪を撫でる市村桜が残された。

「銃を…扱った事があるのか？」

「…昔。」

顔を上げず、小さな声で言葉少なに答える。

「何故か聞いてもいいか？」

「…絶対に守りたいものを、一度と失わない為に…。」

消え入りそうな声で呟く彼女の手に、ポタリと血が滴る。気が付くと、彼女のこめかみからはかなりの血が流れ、服の襟や胸は血で濡れていた。

「これで、傷を押さえてろ。」

俺は自分のハンカチを彼女に渡す。

「えっ、でも…」

「いいから、お前のは、そいつに使つたんだろうが。」

彼女のハンカチは、擦りむいた清志の足に巻いてある。

「すみません、お借りします。」

そう言ひうと、今度は素直に受け取り傷口に当てる。

みるみる赤いシミが広がるとこを見ると、まだ出血は続いている様だ。

「屋敷に着くにはしばらく掛かる。お前も休んでおけ。」

何も言わずに頷いた彼女は、しばらくすると静かな寝息をたてはじめた。

「もう少し、優しい物言いが出来ないもんかねえ？」

溜め息まじりに真吾がごちる。

「つるせえ…。」

そう言つと、俺は不安定な彼女の体を支えるために手をまわして肩を抱いた。

「それにしても、驚きましたね。」

「全くだ。見掛けによらないと言つたが、普通の嬢ちゃんじや無いのは確かだわな。」

前の二人も、彼女が氣に入った様だ。

見掛けよりもずっと苦労してきたんだろう。

この小さな肩に、一体何を背負つて来たのかが、少し気になつた。

岩崎邸に到着した時、車の音を聞きつけ家の者が大勢玄関先に集まつた。

子供の無事を喜び、金が無事な事にも大喜びだつた。

岩崎氏は俺の手を握り締め

「本当に良くやつてくれました！御礼は、また後日とこいじで…」

と言つと、そそくせと邸の中に入つてしまつ。

「ちよつと待つてくれよ、この子は怪我をしちまつてるんだ。おい

つ！」

そういう真吾の言葉も無視され、玄関には誰も居なくなつてしまつた。

「なんだ、ありや？」

遠慮がちに俺達の後ろに立つていた彼女は、何も氣にならない様ににっこり笑うと、

「本日は、坊ちゃまをお助け頂き、本当にありがとうございました。それでは、私は失礼致します。」

と、俺達に向かつて一礼して屋敷に戻る。

「おい！お前！」

俺は、その背中に声を掛けた。

「お前、俺達の所に来る気はないか？」

彼女はゆっくりと振り返り、口元をほころばせて答える。

「…非常にうれしかった。」

第2章（1）

3日後、俺達は依頼料を受け取りに岩崎邸を訪れた。

岩崎氏は、先日の礼を長々と述べると、犯人の事は他言しないよう
にぐじくどと語った。

どうやら、息子が全て話したらしく。

「その件に関しては、全て了解しております。決して他言は致しま
せんので、ご安心を。」

「こういう事務方の仕事は、藤田に任せていれば問題ない。」

「そういえば、あの嬢ちゃんの怪我は、大丈夫だったのかい？」

真吾が尋ねる。

「は？ 怪我ですか？ 誰がでしょ？」

「あの時、俺達と同行した…。」

「ああ、桜の事でしたか。あの者は、もう当家と関わりがありませ
んので…。」

それまで黙つて聞いていた俺は、この時ばかりは身を乗り出した。
「どういう事だ？」

氣色ばむ俺に拳をつかれ、岩崎氏はしどろもどろで話し出した。

「確かにあの娘は息子を救う為に頑張ってくれましたが、何でも銃
を撃つたというじゃありませんか。しかも高明に対して…。」

「それは、あんたの弟が息子を誘拐したからだろうー！」

真吾がむきになって反論する。

「それにしても、主人の弟にする態度ではありません。」

「だから、それは…。」

「それに銃ですよーそんな危ない人間を、当家に置くわけにはいき
ませんし…。」

「…わかつた、行くぞ。」

俺は、席を立つた。

依頼料を受け取りながら、静かに藤田が言つ。

「それでは今後共、巴探偵社を宜しくお願ひ致します。」

玄関を出ると、庭先から

「待つて！」

と声が掛かる。

パタパタと走つて来たのは、清志だった。

「あのね、さくらがね、さくらが居なくなつちやつたの！」

俺のズボンを握り締め、見上げる清志の目が潤む。

「坊ちゃん…。」「

追いかけて来た子守メイドに、俺達は話を聞いた。

「確かに高明様に銃を向けたつていうのもあるんですが、旦那様はあの夜、桜さんを呼び出して、それで…」

「…」

「で、どうやら拒まれたそうなんですが、その時に桜さん、自分に手を掛けるなら自害するつて、割れた硝子で自分の事刺そつしたみたいで…。」「

「なんでえ、それ…。てめえの息子を命掛けで助けた者への、それが仕打ちかよつ！」「

「確かに、酷いな…。」「

「それに、多分彼女は…。」「

「他にも何か？」

「あ…いえ…特には…。」「

と、歯切れが悪い。

「彼女が出て行つたのは、いつです？」

「昨日です。皆に挨拶をして、夕方に。」「

「彼女の行き先に、心当たりは無いか？」「

「さあ、彼女身内も居ないって、天涯孤獨つて言つてたし…お花見する位しか出掛けなかつたし。」「

「花見？」

「そう、彼女名前が桜だから桜の花が好きだつて。でも、一緒に花見した時、あまり楽しそうじゃなかつたな…なんか、悲しそうな…。それじゃ、わたしそろそろ…。」

そう言つと、メイドは屋敷の庭に戻つて行つた。

「どうする、トシ？お前、彼女を引き抜くつもりだつたんじやないのか？」

「まあな…しかし、居なくなつちまつたんなら、しょうがねえな。「そんな状況で辞めたのであれば、次への紹介状は書いて貰えなかつたと考へるべきでしょうね。」

「そうだな。」

「俺は、家政婦紹介所を当たつてみます。」

「おつ、それじゃ、俺も一緒に回るわ。一人より効率いいだろ？」

「おい、何もそこまで…。」

「何言つてんだよ。あんなに女を雇うのを嫌がつてたお前が、食指を動かす女が居るなら、何が何でも探さねえとな！」

「人を探すのも、探偵の職務です。」

「じゃあなー所長さんは、自力で帰れ！」

そう言つうと、二人は車で走り去つた。

何を熱くなつてるんだ！まつたく…。

しかし、可哀想に彼女は散々な目に遭つたらしい。

だいたい、彼女が銃を持ったきつかけは、俺を助ける為じや無かつたか？

「くそつ、礼も言えてねえじゃねえか。」

大通りで乗合タクシーに乗り、上野の事務所を目指す。

ふと思ひ付いて、上野山に行き先を変更した。

古くから花見の名所たが、今が盛りの桜を見ようと、大勢の花見客で賑わっていた。

いくら桜が好きだからといって、こんな状況の時に花見は無いか…
そう思いつつ、人波の中に彼女の姿を探す。

陽が陰り出すと人もまばらになり、半ば諦めかけた時、大きな桜の古木の下に布を敷き、座っている和装の彼女を見つけた。

「おい。」

俺が声を掛けると、彼女は驚いた様に目を丸くし、そしてにっこりと微笑んだ。

「まあ、こんばんは。奇遇ですね！貴方もお花見ですか？」

「まあな…こ…、いいか？」

「ええ、どうぞ。」

俺は彼女の隣に腰を下ろし、何と続けようかと迷う。
「和装なんで、見間違いかと思った。」

「外出用の洋服は、汚してしまったので…。」

彼女は、そう恥ずかしそうに俯いた。

「桜が好きなのか？」

「ええ、とても…。」

遠くを見ながら微笑む。

「傷は…。」

そう言つて彼女のこめかみを触ると、

「…つつ！」

と、小さく叫ぶ。まだ傷は癒えていない様だ。

「すまん。医者には診せたのか？」

彼女は、被りを振る。

「大丈夫です。それに、そんな暇無かつたし…。」

「あれだけ出血してたんだ、医者には診せた方がいい。」

「そうですね…。」

彼女の首筋には、新しい傷口が増え、手にも白い包帯が痛々しい。

「岩崎の屋敷を、出たんだってな。」

少し驚いたような顔をして、すぐにはかむ様な笑顔を作る。

「『存知だつたんですか？行かれたのですね、お屋敷に。』

「清志が、寂しがつていていたぞ。」

「そうですか…でも、いざれあそこもお暇しよつと思つていたんで
す。」

また、沈黙。

春の夜風が心地良い。

「タベは、どうしていたんだ？」

小さな溜め息をついて、少しちゃかす様に
「歩いてましたよ。」

と、笑う。

「一晩中？」

「…春のお月様が、綺麗でしたからね…。」

「これから、どうする？」

それには答えず、彼女は俺の肩に頭をもたげる。

「…少しだけ…、少しだけ、こうしててもいいですか？」
「ああ。」

彼女が少し震えているのがわかる。

声を殺して泣いている。

屋敷勤めは、主によつては理不尽な事も多いと聞く。

抱き締めてやりたくなる衝動に駆られるが、彼女はそれを望んでい
るのか？

俺の頭の中では色々な葛藤をしている内に、彼女のバランスが崩れ、
前のめりに倒れる。

「おい、大丈夫かつ？！」

「…はい…。」

彼女の額に手をやると、火の様に熱い。

「お前、熱があるじゃねえか！」

「…大丈夫…です。」

「大丈夫じゃねえ！ちょっと待つてろ…」

俺は、麓の人力を呼ぶと、彼女を事務所まで連れ帰つた。

いきなり女を抱えて帰つて来た俺を見て、皆が一様に仰天したが、俺の唯ならぬ様子と彼女を見て、慌てて行動を起こす。

「藤田、高柳先生を呼んで来てくれ。」

「了解しました！」

「キヨ、彼女を着替えさせてくれ。」「

「わかりました。」「

「トシ、俺は何をすればいい？」「

「おまえは、氷屋の親父に店を開けさせて、氷買つて来い！彼女凄い熱出しちまつてる。」

「あいよー任しとけ！」「

それぞれがバタバタと動き、1時間後には無事に往診して貰つ事が出来た。

「先生、容態は？」

「かなり疲労が溜まっているのも有るが、あの頭の傷がなあ……それに、肋骨にもヒビがいつてそうだ。体のあちこちに真新しい打撲痕があつてな……あれは縛られて、しこたま殴られたって感じだぞ。彼女、一体何があつたのかね？」

「まあ、色々な……。」

俺の手は、血が滲む程強く握られた。

「暫くは、絶対安静だ。もしも吐く様なら、すぐに連絡をよこしない。薬を用意しておくから、後で取り戻さなければな……。」

「ありがとうございました。」俺は、先生に深々と頭を下げた。

「藤田、すまねえが、先生送りがてら、薬貰つて来てくれるか？」

「承知しました。」

第2章（2）

藤田が高柳先生を送り出ると、俺はソファーに身を沈めた。
「酷い話だ、あのヒヒ親父、とんでもサド野郎じゃねえか！」
真吾が上目使いに、こっちを睨む。

「あの家じや、語りられぬ秘密つてヤツなんだろ？。子守が言つて
ただぶ。」

「で、トシ。彼女に話したのか？」

「何を？」

「ここで、雇いたいって事だよ！」

「…まだだ。」

「何だよ、じやあ何話してたんだよ…。」

「だから…その事を話す前に、彼女倒れちまつたんだろうがつ…。
そつ言つとソファーを蹴つて、俺は階段を駆け上がった。

彼女は、2階の客間に床を取らせてある。

「キヨ、入るぞ。」

そつ言つと、部屋に踏み入る。

キヨは、ベッドの横に座り、彼女の布団を直してやつていた。

キヨの目が赤い。

「どうした？ キヨ？」

「キヨは、こんな痛々しい傷は、初めてでござります。お医者様の
言つには、表から見えない所だけを、何か道具でぶつんだとか。そ
れは酷い癌と傷が体中に…。」

そつ言つて、また涙ぐむ。

「…う…ん…」

彼女は呻き、仕切りに手を動かす。

「はいはい、此処に有りますよ。」

そつ言つてキヨが彼女に握らせたのは、懐中時計だった。

舶来物の様で、かなり年代物だ。

彼女は時計を握らせると、安心した様に穏やかな顔になる。

「手元に無いと、無意識に探すんですよ。余程大事な品なんでしょうねえ。」

「キヨ、夜は俺が付いているから、キヨは休め。」

「でも、坊ちゃん…。」

「キヨには、俺達の世話もある。どうしても手に入る時には、助けてくれ。」

「わかりました。何時でもお声を掛けて下さいまし。」

「ああ、ありがとう、キヨ。」

ベッドの横に置いた椅子に腰を掛け、彼女の顔を覗き込んだ。先日の勇ましい彼女、上野で声を殺して泣いていた彼女、今熱にうかされている彼女。

全部同じ女なのに…。不思議な奴だ。

「…う…」

熱にうなされた彼女が寝返りをうつり、その拍子に懷中時計がベッドから滑り落ちる。

それを拾った途端、

「…くつ！」

俺は、激しい目眩を覚え、時計を持ったままベッドに突っ伏した。

此処はどこだ？

夜の街、古めかしい町屋を、俺は走っている。
仲間と誰かを追っている。

相手は、数人の侍。

板土塀まで追い込むと、相手はこちらに向き直り、刀を抜いて切りかかって来た。

俺は…俺達は、負ける気がしない。

あつという間に抜刀し、奴等を片付けちました。

ひつ捕られた者もいる。

そいつ等を連れて、意氣揚々と仲間の待つ館に帰る。

自室に戻ると、障子が開いて彼女が茶を持つて入つて來た。

今日も和装なんだな。

袴姿も、凛々しくていいもんだ。

彼女は、茶を差し出し、一生懸命何かを話している。

俺は、それを聞きながら、茶を啜る。

美味い。その味に、ホツとする。

その時、誰かが障子の向こうから声を掛けた。

「……さん」

「西園寺さん！」

肩を揺すられ、飛び起きた。

夢か…？

藤田に、心配そうに覗き込まれていた。

「大丈夫ですか？」

「ああ、うつらうつらしていたらしい。」

「薬を貰つて来ました。今晚は、俺が変わりましょつか？」

「いや、いい。大丈夫だ。」

藤田はそれ以上何も言わず、彼女の薬と、キヨが俺の為に作つた握り飯を置いていった。

俺の手の中には、まだ彼女の懐中時計が握られていた。

しつかりとした鎖が付いたその時計は、明らかに男物だった。唐草模様の表面に無数の傷が付き、本体の一部はへこんでいる。

竜頭の先に付いているボタンを押すと、蓋が跳ね上がった。

しかし、文字版の硝子にはヒビがはいり、針も少し錆び付いている。竜頭をまわしても全く手応えがなく、針も動こうとしなかつた。

「壊れちまってるのか…。」

そう呟いた時、ふと視線を感じた。

彼女の目が開いている。

「おい、大丈夫か？」

そう問うても、視線がはつきり定まらない。

ただ、時計を持った俺を見て、嬉しそうに微笑む。

「あ、すまない。見せて貰っていた。」

そう言つて時計を握らせると、彼女は愛おしそうに胸の上で時計を握り締めると、また微睡みの世界に落ちて行った。

父親の形見か何かか？

何れにしても、彼女にとつては、大切な御守りの様なものなのだろう。

一週間すると、彼女はベッドの上に起き上がる事が出来る様になつた。

「本当に、お世話を掛けてしまい、申し訳ありません。何とお礼を申し上げてよいか…。」

「いや…。」

話したい事があると言われ部屋に来てみれば、以前の彼女に戻つて安心する一方で、他人行儀な彼女に何となく居心地が悪い。

「明日にでも、お暇しようと思つております。」

「…。」

「掛かつた治療費は、働いてきちんとお返し致しますので。」

「…なあ。」

「はい？」

「此処を出て、どこか行く当てがあるのか？」

「…いえ。でも、大丈夫です。今迄もそうして来ましたし、何とかなります。」

そう言つと、にっこりと笑う。

「それで、またあんな事をされる様な屋敷勤めをするのか？」

少し視線を落とし、身を固くしたまま彼女は言つた。

「それでも、私の様に身寄りの無い者には、人間らしい扱いをして

頂ける、良い奉公先だつたんですよ…。寝る場所と着る物と食事が与えられ、少しでしたがお給金も頂けて…。」

「だから、折檻されてもいいっていうのか！」

俺は、だんだん腹が立つて來た。無意識に立ち上がり話し始める。

「…あれは…。私が、旦那様を拒んだから…。」

「屋敷内でも、よくある事なのか？」

「可哀想な方々なんです。人を愛する意味を、ご存知無い…。」

「お前、何があつたんだ？」

「はい？」

「あんな扱いされて、許す事が出来るつていうのか？」

彼女は、なにも答えない。

俺の胸がざわめいた。

屋敷勤めをしていれば、きっとこんな事は、よくある事なのだろう。

なのに、無性に腹が立つ。

「犬猫の様にぶん殴られ、それでも許すつて、お前には人としての誇りは無いのか？！」

「…あります。」

「何故逃げ出さなかつたんだ？お前自身を何故大切にしない！」

「…。大にした結果が、これなんです。」

ガツンと頭を殴られた様な気がした。

そうだ、彼女は女としての誇りを守つたのだった。

軽い頭痛を覚えて、椅子に座る。

「…すまない。」

「いえ、何も西園寺さんに謝つて頂かなくとも…。」

と、彼女は恐縮する。

「いや、そうじゃ無くて…お前に銃を握らせたのは、俺の責任だ。」

「いえ…、そんな…。」

「いや、あれは俺の判断ミスだ。結果的に、それがお前の仕事を奪

い、折檻される毎にもあわせちまつた。だが、俺の命を救つて貰つた事に感謝する。」

「あの時は夢中で…自分でも驚いています。

それに、西園寺さんは私を助けて下さいました。ありがとうございました。」

沈黙が怖くて、俺は窓を開けた。

すっかり暖かくなつた風が入り込む。

「此処にいる。」

「…えつ？」

「前に言つただろつ。お前さえ良かつたら、ここに雇つてやる。」

「西園寺さん…。」

「俺達は、男三人で探偵社をやつてる。だが、この間の様に、どうしても女手の必要な時がある。そんな時に手伝つてくれりやあいい。」

「…。」

「普段は、キヨを手伝つて、家の事を頼む。キヨも歳なんで、なかなか大変なんだ。」

「…。」

「此処は部屋が余つてるから、住むのも問題無い。勿論、食事は自分で食う。」

「…。」

「あ、給金はそんなに期待しないでくれ。交渉なら藤田に…」

「あの…。」

「何だ?まだ何かあるのか?」

「本当に、私で宜しいのですか?」

「当たり前だ。だから誘つている。眞吾も藤田も、お前を認めているし。」

「…わかりました。お世話になります。」

彼女は、深々と礼をした。

ホツとした俺は、最後に彼女に尋ねた。

「お前に取つて、一番大切な物つて何だ？」

「…命と、誠の心です。」

彼女の真っ直ぐな瞳が、俺を射る。

「それじゃ…」

俺は、彼女の顎を持ち上げて、再び自分の瞳と合わせる様に話す。
「所長としての命令だ。自分の命も大切にしろ。仕事開始は、もう少し体力が戻つてからだ。いいな？」

「はい。」

彼女の瞳の奥が輝いた気がした。

が、そこでまた目眩が？

デジャヴ？

以前にも、同じ様な事があつた？

バランスを崩した俺は、彼女に抱きかかえられる形になる。

「大丈夫ですか？西園寺さん！」

彼女の肩に頭を預けたまま、俺は聞いた。

「…なあ、お前と以前何処かで会つた事…あつたか？」

「…さあ…どうでしよう？」

窓からふく風は、春から初夏に移る香りをはらんでいた。

第3章（1）

彼女を雇う事が決まり、皆は一様に喜んだが、中でもキヨの喜びは尋常では無かつた。

彼女の看病をする内に、すっかり打ち解け、同じ職場の仲間が出来るというより、娘が出来た様なはしゃぎ様だ。

数日後、彼女は家事が出来る迄に回復し、俺達も日常の生活が戻つていた。

「坊ちゃん、今日は桜さんと買い物に出ますが、宜しくついでに来ますか？」

キヨが、いそいそと聞く。

「ああ、別に構わないが。」

「キヨさん、何買いに行くんだい？」

「桜さんの着る物ですよ。」

「キヨさん、私は別に…。」

「何言つてるんです！若い娘が、着の身着のままで言い訳ありませんよ！」

確かに、あれから彼女は、此処に来た時の着物しか着ていない。

後は、浴衣と洋服が一着。

その洋服も、先日の怪我で付いた血が落ちず、とても着れないとヨガボヤいていた。

「ああ、構わない。一通り用意してやつてくれ。」

「あ、俺はあのメイドの格好がいいな。」

真吾が、ソファードで覗きながら笑う。

「事務所でメイド姿というのは、そぐわないのではないか？」

「えー、そうかあ？ 可愛いと思うぞ。」

藤田と真吾の様子を笑いながら見ていた彼女は、俺に向き直り聞いた。

「所長は、どう思われますか？」

俺は…

「……袴。」

「えつ？」

「あ、いや…お前の好きにするといい。」

「はい。」

女達が出掛けると、事務所がガランとする。

「やつぱり良いよなあ、若い娘が居るつてこいつのせ。」

「確かに、事務所も清潔になつたしな。」

真吾が手をヒラヒラさせて

「違う違う藤田、空気がだよ！ 空気が華やぐって！」

「それでは、今度こそ愛想を尽かして出て行かれぬ様に、十分注意する事だな。」

「てめえ、俺だけの責任かよ！」

そう言つと、真吾は藤田に掴み掛かる。

「止めておけ、埃が立つ。どうしてもとこいつなら、相手をするが…。」

「我が事務所に女中が長居しない最大の原因は、血の氣の多い男が3人居るという事にある。」

拳を交えるのは、意志の疎通を図らんが為という様な具合だから、キヨの様に幼い頃から見ている者以外は、大概色を失い恐れおののく。

今回は、珍しく真吾が引き、撫然とソファーに身を沈める。

「それにしても、トシ。あればねえだろ。」

「何だ？」

「袴だよ。袴。」

「それは、俺も思いました。所長にしては、珍しいと。」

「あ…。」

煙草に火を付け、ゆっくりと煙を吐く。

何故あんな事を言つたのか、俺自身信じられなかつた。

ただ、何となく彼女の立ち働く姿に、袴がしつくり来る様な気がして…彼女の袴姿など見たことも無いのに?

最近の俺は、どうかしている…。

「トシ?どうした?」

「ああ、少し疲れているのかもしかれんな…。」

「おお、休め休め! そんでもって、桜に看病してもらえ。」

真吾は、ニヤニヤしてして俺を見る。

「…うるせえ。」

そう言いながら、俺は忙しく煙を吐き出した。

夕方、買い物を済ませて帰つて来ても、キヨの興奮は続いていた。彼女の着物や洋服は、殆どキヨが見立てたらしい。

皆で夕食を食べながら、買い物談義に花が咲く。

「それで、自分で選んだ物は、無かつたのか、桜?」

「それなんですよ、真吾坊ちゃま。桜さんったら、袴だけ。

俺達の箸が、一斉に止まる。

「しかも、男袴なんですか。」

「あれは、武道の稽古用です。」

「何か、武道を修練していたのか?」

「ええ。昔、小太刀を…。」

「今時珍しいな。でも、小太刀なんか荷物にあつたか?」

「ある方に、お預けしてあるので、近々行つて稽古も付けて頂こうと思つています。」

「そうか、そんな知り合いがいたのか。」

「はい。古くからの知り合いで…。」

「それにしても、今日桜さんが色んなお召しを着ているのを見ていたら、キヨは懐かしい人を思い出しましたよ。」

キヨは、遠い眼差しで回想する。

「坊ちやま、覚えていませんか？昔、西園寺の伊豆の別邸で働いていた…名前を、何と言つたでしょうねえ？」

ガチャンと、彼女が湯飲みを倒す。

「あ、済みません！」

慌てて拭く彼女を見て、キヨが笑う。

「そんな所も、そつくりでしたねえ。」

「よく有る顔だからですよ。」

彼女は笑つて答えたが、俺と真吾は同じ事を考へているのがお互いにわかつた。

伊豆の別邸…子供の頃、よく行った。

数人いた女中の中で、年若い姉やがよく面倒を見ててくれた。

その姉やの顔…。

「そうなのかしらねえ？御親戚では無い？」

「違つと思います。」

「そう…。じゃあ他人の空似ね。そういうえば、その子にも、同じ様な話しさました事がありましたねえ。キヨがまだ西園寺にお仕えする前、京都で攘夷派の浪士に絡まれている所を助けて貰つた時に居た娘さんに似ていてねえ…。」

「キヨさん、それはとんでもなく古い話だなあ。」

「いえね。その時助けて頂いた方々の中に、素敵な方がいらして…。キヨの初恋でございました。」

今度は、藤田がじつと手を止めてキヨの話を聞いている。

「痛つ。」

割れた湯飲みを片付けていた彼女が、指を切つたらしい。

「消毒した方がいいだろ？。こちりへ…。」

藤田が席を立ち、事務所に向かつ。

彼女は戸惑いながら、藤田の後を着いて行つた。

第3章（2）

* * * * *

事務所の薬箱を開けながら、俺は頭の中を素早く回転させていた。
市村が事務所に入つて来て、俺の向かいに座る。

「手を出せ。」

おずおずと出す手を取る。

脈が早く、掌にはジットリと汗をかいている。
傷を消毒しながら、目線を上げずに話す。

「…市村、今度少し時間を作つて貰えるか？」

「私も、藤田さんにお願いがあります。」

「何だ？」

「お父様に、ご連絡を取つて頂けませんか？」

「？！」

「市村が、是非稽古をつけて頂きたいと。」

「先程の話、我が父の事だったのか？」

「はい。」

「それでは、その折に、俺の質問にも答えて貰いたい。」

「何でしよう？」

「…魔女について。」

「…わかりました。」

「ただいま戻りました。」

数日後、俺は出掛ける用事がてら、彼女を小太刀の稽古に送ると所長に話し、車で実家に向かう。

「お帰りなさい、剛さん。市村さん、いらっしゃい。」
母が、俺達を迎える。

「『』無沙汰致しております、時尾様。」

「さあ、どうぞ…。先にお着替えになる?あの人は、道場で待つて
いるから。」

「はい。」

そう言つと、別室に彼女を通した。

「母上も、彼女をよくご存知なのですか?」

「以前、2度程お見えになつた事があるのですよ。」

「彼女は、一体…。」

母は、眉根をよせて静かに言つた。

「それは、『』本人と父上にお聞きなさい。」

「失礼します。」

袴に着替えた彼女は、髪を高く結びつけ、凛とした佇まいになつた。
俺は、彼女を道場に連れて行く。

「失礼します。父上、市村桜さんをお連れしました。」

道場上座に座つた父の向かいに、市村は進み出て手を付いた。

「ご無沙汰致しております。斎藤さん。」

「…その名前で呼ばれるのは、久し振りだ。変わり無い様だな、市
村。」

その通り取りを聞いて、予想はしていたものの大きな衝撃が走る。
俺の父は、以前警官隊に居たが、それ以前幕末には新撰組隊士として名を馳せていた。

三番隊組長といえば、居合いの達人、維新の志士を大勢手に掛けた
が、鳥羽伏見の戦いで会津に組みし、官軍に敗れた後は会津藩お預
かりとなつた身だ。

斎藤一という名前は、新撰組に居た時に父が使つていた名前。
その名前を、市村は言つた。

今から50年近く前の筈。

「今日は、お預かり頂いていた小太刀を、お返し頂きたく参りました。」

「稽古も所望だつたな。」

「はい、お願ひ致します。」

父は、用意していた小太刀を市村の前に置く。

市村は、それを腰に差し、スラリと抜くと父と対峙した。

掛け声と共に、市村は父に向かう。

キンッ！という金属音が何度も交わされ、父が市村を力で跳ね飛ばした。

息と体制を整える市村に対し、父は刀を鞘に收め、低い体勢を取る。あの構えは！

間合いを見ていた市村は、再び掛け声と共に突っ込む。

銀色の光が弧を描き、キンッ！という音と共に市村の小太刀が吹っ飛び、彼女の喉元に刃が掛かる。

新撰組三番隊組長、斎藤一の抜刀術。

未だ衰えを知らぬその技に、俺の背中は汗で濡れる。まるで、自分が対峙している様だ。

父は刀を收め、市村も飛ばされた刀を收めて座る。

「ありがとうございました。」

「いい立ち会いだった。」

「斎藤さん、私の腕は…。」

「心配するな。相変わらず、曇りの無い剣だ。」

「良かつた。しばらく手にしていなかつたので、不安だつたんですね。」

そう言つと、汗を拭い彼女は笑う。

いつも事務所で見せるのとは違つ、少女の様なその笑顔に、俺は見取れていた。

「その小太刀を手に取ると言つ事は、現れたという事が？」

「はい。実際に小太刀を使う事にはならないと思いますが、この小太刀も又、私の心の支えですか？」

「そうか…。市村、剛と同じ所に居るのだと聞いたが。」

「はい。藤田さんには、お世話になつております。」

父は、俺の方に視線を移すと、

「剛、立ち会いなさい。市村、見取り稽古をするといい。まだ、腕が痺れるだらう。」

「ありがとうございます。」

それからしばらく、俺は久々に父と立ち会つた。

幼い頃から稽古を付けて貰つていたとはいへ、この人の剣には到底及ぶものではない。

父の剣は、竹刀よりも真剣、実戦で力を發揮する。

それを、いきなり真剣で立ち会いだと？

有り得ない…。

「今日は、お前の方が心に乱れがある様だな。」

「申し訳ありません…。」

父は、小太刀用の竹刀を持つて来ると、市村の前に置いた。
「普段の稽古は、剛に付けてもらうといい。真剣と言う訳にも、いかないだろうからな。これを持って行け。」

「ありがとうございます。」

稽古が終わり、彼女が着替えていた間、俺は父に問いただした。

「父上、彼女は一体…。」

父は、腕を組み静かに目を閉じて言った。

「…お前も、先程の会話を聞いて、薄々は理解出来たのではないのか？」

「しかし、いくら何でも…。」

「彼女に…話を聞くのか？」

「市村は、答えてくれると言いました。」

「… そうか…」

深いため息を吐くと、居住まいを正し、父は言った。

「話を聞くのは構わん。ただ、他言無用だ。お前の仲間にもだ。彼女は、紛れもなく誠の旗を掲げた、新撰組の隊士だ。その秘密を他言するとなれば、私が容赦はしない。」

そして、いきなり抜刀すると、切つ先を俺の喉元に当てたまま言った。

「彼女には、果たす事がある。その思いだけで、今迄生きてきた。本当に、斬り殺される様な威嚇に、俺のこめかみから汗が流れ落ちる。

「…。」

やがて刀を収めると、

「剛、市村を守ってやれ。絶対に死なせるな。」

と言った。

後ろで扉を開ける音がする。

「剛さん、市村さんがお待ちですよ。」

と、母が声を掛ける。

父に一礼すると、母と共に道場を出た。

「… 殺されかねない威嚇でしたわね。」

「見ておられたのですか？」

「市村さんの事になると、未だに血が湧くのでしょうかね。」

「どういう事です？」

「父上の、昔の想い人ですよ。多分、間違いありません。」

「そう言ひと、母は「口口口」と笑った。

「では、昔の恋人…？」

「いいえ、父上の片思いでしょ。市村さんは、気付いてらっしゃらないから、剛さんもそのつもりでね…。」

「…。」

今日は、とんでも無い事を、山の様に知ってしまう。「なるべし…」。

座敷には、市村が静か座り、俺を待っていた。

「待たせて済まない。」

「いえ。」

母が座を外すと、俺は口火を切った。

「俺が、父の息子だと、いつ気が付いた？」

「初めから、お名前も存じておりましたし、お父上の若い頃に瓜二つでしたので…。」

「…。」

「それに以前、此方にお伺いした時に、お会いしました。お忘れだと思いますが…。」

「いや…。」

俺には、朧気ながら記憶があった。

彼女がまだ寝込んでいた頃、持っていた懐中時計を見て、幼い日の記憶が蘇った。

家に来宅した女性に、庭で遊んで貰った記憶。

彼女の懐から取り出した時計を見せて貰った俺は、粗相をして落としてしまった。

落ちた拍子に蓋が開き、文字盤の硝子にヒビが入っている事に驚き青くなつた。

父や母の怒り声が響く中、彼女はふわりと俺を抱き寄せたまま優しく言つた。

「驚きましたね坊ちゃん。大丈夫ですよ。この時計は、元々壊れているんですよ。」

「本当に？」

「はい。だから、気にしないで下さい。」

子供ながらにその優しさが嬉しくて、自分から抱き付いた。

顔は、はつきり覚えていない…だが、母とは違う、いい匂いがした

…。

「藤田さん?」 「いや…、先日言つた、魔女の話だが。知つているのか?」

「はい。」

『魔女伝説』 誠しやかに流れるその話は、どこからともなく上流階級の中で広まつてゐる都市伝説。

この世には、永遠に歳を取らない美女が居る。

夜な夜な人の生き血を啜り、変わらぬ美貌を保ち続けている…という吸血鬼の話だ。

「あの魔女とは、お前の事か?」

「噂の元は、私かもしません。かなり脚色されていますが…。」

そう言つと、クスクスと笑つた。

「吸血鬼というのも?」

「脚色ですよ。」

「何時からだ?歳を取ることが無くなつたのは。」

「多分…明治の御代になつて、直ぐ位だと思います。」

「何故だ?どうして…。」

「わかりません。」

「!?

「私にも、解らないのです。」

「…。」

「年を取らないというのは、やはり氣味が悪いですからね。奉公先も3年から5年で変わらないといけませんでした。何十年も空けて同じお屋敷に勤める事もありましたが…それにしても、先日のキヨさんには参りました。」

と、子供の様に笑つた。

「西園寺の伊豆の別邸というのに居たのも、お前なのか？」

「そうです。」

「所長や真吾とも、会つた事があるんだな？」

「ええ、可愛かつたですよ、お一人共。」

俺は顔をしかめて、こめかみを揉んだ。

父上、もしかしたらバレるのは時間の問題かもしません……。「誰か、人を探していたのか？」

「……はい。」

「……敵か何か、いわくのある人物なのか？」

「……。」

「俺は先程父より、お前を守る様に言われた。絶対に死なせてはならぬと。」

「……。」

「相手は誰だ？誰から、お前を守ればいい？」

「……。」

「市村……」

「……」勘弁下さい。そればかりは……。」

そう言つて、彼女は深々と頭を垂れた。

第3章（3）

彼女の体からは、何者をも拒絶する雰囲気が漂つ。

これ以上は、無理か。

「…帰るぞ、市村。」

「はい。」

俺達は、実家を出た。

帰る車の中の重い沈黙が耐えきれず、俺は彼女に話しかける。

「お前の小太刀の腕、なかなかのものだつた。」

「ありがとうございます。」

「しかし、驚いたぞ。父を相手に、いきなり真剣で挑むとは…。」

「斎藤さんは、真剣でしか手合わせして頂いた事が無いんです。なる程、それが普通の事だつたという事か。」

「その…新撰組での父は、どういう人物だつた?」

「…強かつたですよ。とても。抜刀術では、沖田さんも適いませんでした。新月の闇を切り裂く様な…そんな剣でした。お父様から、お聞きにはならないのですか?」

「あの通り寡黙な人でな…あの頃の事は、特に何も話さない。今田程雄弁な父を見たのは、初めてかもしだん。」

「昔から寡黙な方でしたから…。真面目で、努力家で誰よりも忠実で…でも、優しくて面倒味が良い方でしたよ。」

「父がか!？」

「ええ、いつもさう気なく気を配る方で、斎藤さんは隠し事出来なくて。」

母の言葉が蘇る。

父は、昔から彼女を見守っていたのだろうか?

「…よく、似ていらっしゃいます。藤田さん」。

「…。」

運転を理由に前を向き、顔が紅潮するのを隠す。

「もう直ぐ、着くぞ。」

街が茜色に染まるのが美しいと、素直に思った。

第4章（1）

梅雨明け間近と思われる、ある日の午後。
明け方に降った雨が上がる、久々の太陽が照りつけ、暑さと湿度
で俺の機嫌は滅法悪い。
庭では、竹刀の音が響く。

小太刀の稽古から帰った日以来、彼女は時間があると藤田と練習を
する事が増えた。

あの日も、藤田と一緒に帰つて来て、それから何となく藤田が彼女
を気遣つているのが分かる。

そして、彼女も…。

以前の屋敷勤めの時の様な硬さが少し取れ、年相応の明るさも出て
来た。

いい事じゃねえか…。

なのに、何を苛つく事がある?

この、蒸し暑さのせいだ…くそつたれめつ！

「あー、あつちい！この暑い中、桜の奴元氣だわ。俺と藤田、二人
を相手するんだぜ。」

暑苦しい奴が、事務所に戻つて來た。

「どこで剣なんか振るつつもりなんだか…、返つて危なくて連れて
歩けねえよ。」

「実際に振るうつもりは、ないんだろうよ。本人も、精神修行って
言つてるしな。」

「精神修行ねえ…。」

「トシ、いやに批判的じゃねえか？」

「そんな事は、ねえよ…。」

「俺も、立ち会つてみて驚いたぜ。なかなかもんだ。お前も、一度試してみればいい。」

「お前の喧嘩剣法なんて、練習には成らんだろう。…まあ、その内な。」

その時、ベルの音と共に表のドアが開いて、汗だくの男が入つて來た。

「暑いなあ、今日は！ よう、お一人さん！」

「橋警部、久し振りじゃないですか。」

この人は、警視庁の橋警部。

俺達の仕事を助けたり、助けられたり、良い関係を続けている。

「今日は、どうしたんですね？」

「実は、助けて欲しい事があつてね。」

「それは、正式な捜査協力依頼ですか？」

「…そうだ。」

「わかりました。おい真吾、藤田を呼んで来てくれ。」

「申し訳無いが、あのお嬢さんにも頼みたいのだが…。」

「…女手が必要な仕事つて事か。」

「そうだ。」

「わかつた。少し時間をやつてくれるか？今、外で稽古中なんだ。用意をさせて来る。」

話しを聞いた真吾が、二人を呼びに行く。

「お嬢さん、桜さんと言つたか、すっかり此処に馴染んだ様じやないか。」

「お陰さんでな。」

「藤田君と稽古つて、何か…。」

「ああ…、小太刀を畠つていたそうなんだ…。」

嫌な予感がした。

「ほう、武道の嗜みがあるのか。そりやあ、いい。」

「橋さん、彼女には…。」

そう言おうとしたのと、橋警部の言葉が重なる。

「今日は、彼女の協力が不可欠なんだよ。色々、複雑でな…。」

しばらくして全員が揃つた所で、橋警部は話を始めた。

「西園寺君、元駐清国特命全権公使だった大鳥男爵とは面識があるかね？」

「一応は。以前元老院議官も務めていた人だろ?」

「彼の御子息とは?」

「いや、無い。といふか…。」

「2人おられたのだがな、亡くなられた。」

「…。」

「2人共に、それぞれ1人ずつ子供があつてな。長男の御子息が、穂君5歳。次男の御子息が瑠嘉君12歳。この子供達が、何者かに毒を盛られた。」

「!」

「まあ、大事には至らなかつたのだが、屋敷内での事だし、相手は男爵家だ。大っぴらに捜査も出来ん。というか、捜査自体許して貰えん。」

「成る程、さりとて繰り返されるかもしだれない犯罪を、放つてもおけない、と…。」

「今回は、閑門が多くてな…。」

「?」

「まず、男爵から攻略せんと、家の者に接触も出来ん。然も、屋敷内という、閉鎖空間での事件だ。」

「潜入捜査という事か。」

「どうだろうか?」

そう言つて、橋警部は彼女を見た。

成る程、以前屋敷奉公していた彼女には、打つて付けだ。しかし…。

「君の名前を出したのは、男爵の方からなんだ。」

「何故だ？」

「…次男の御子息の瑠嘉君は、西洋人との間に出来た子供らしい。」

「…そういう事か。」

俺は、事務所の面々を見る。

皆が、一応に頷く。

「わかった。この依頼、受けさせて貰おう。」

俺の父親は、若い頃海外に留学していた。

そこで出会ったフランス女性と恋仲になり、俺が生まれた。
母親は、出産後すぐに亡くなつたそうだ。

俺の家も爵位を持ったそぞこの家柄だが、流石に外国人との間に出来た子供を正式な跡取りとする事は出来ず、俺は今自由な生活をしている。

親子関係も、妹達との関係も、決して悪いものでは無いのは、一重に親父の仁徳だらうと感謝している。

だがこんな俺でも、若い頃はその境遇に悩み、色々と葛藤したものだ。

その武勇伝も、誠しやかに伝わっている。

孫の事を思いや

つて、男爵は俺を名指して來たんだろう。

俺達は、全員揃つて小田原に向かつている。
男爵は今、本宅を出て、別荘に居るらしい。

別荘で男爵に面会を求めるヒ、俺達は応接室に通された。

先年、大きな津波で全壊し、新築された別荘は、モダンな和洋折衷建築だ。

程なくして入つて來た氣難しそうな男爵に、我々は挨拶をする。

髭の立派な老人は、俺達を見て…正確には彼女を見て、明らかに狼狽した。

「きつ、君は…。」

少しはにかんだ様に笑う彼女は、

「…」無沙汰致しております。御前。」

と言つた。

知り合いか？と思つた瞬間、男爵は彼女を抱き締めた。
呆気に取られる俺達に向かい、

「君達、少し失礼するよ。」

そう言つと、彼女の腕を取り、退出してしまつた。

「あ…何だ、ありや？」

「知り合いの様ですね。」

それから、小一時間は待たされただろうか？

「流石に、遅過ぎるんじゃねえか、トシ？妙な事になつてるんじゃ

…。」

「まさか、その様な事も無いかと…。」

「でも、いきなりの抱擁だぜ！ありやあ、生き別れの娘が恋人にでも会つたつて感じだつたしよ。」

俺は、心の中の不安を打ち消しながら、苛々していた。

「お待たせしたね。」

と部屋に入ってきた男爵に向かい、

「大鳥男爵、申し訳無いが、この依頼は受けかねる。失礼。」

そう言つと、

「来いつ！」

と彼女の手首を荒々しく掴んだ。

「待つて下さい、所長！藤田さん、お願ひ…。」

そう叫ぶ彼女を、引き摺る様に退室した。

そのまますんずん駐車場まで来た所で、彼女は手を振り払う。

「どうされたんですか、所長！」

「どうしたも、こうしたも、ねえ！」

「落ち着いて下さー。依頼は、どうなさるんですー。」

俺は振り返ると、彼女の両手首を掴み、彼女の背中を車のドアに力一杯押し付けた。

「…っ！しょ、所長？！」

「俺にはっ！依頼よりも大事な事がある！」

「…所長？」

そのまま、噛み付く様に彼女を睨み付けた。

「…何をしていた！」

「何つて…お話ししていただけです。」

再び、力任せに彼女を押し付けて問う。

「本当だろうな！」

「古い、知り合いなんです。何年も連絡を取っていなかつたので、それで…」

小さな声で、彼女は言った。

俺の口から、深い溜め息が出る。

力が抜け、支え切れずに、彼女にもたれる形になり、慌てて彼女が抱き止め、支えてくれる。

「…勘弁してくれ。寿命が縮まつた…。」

「…私を…私の身を案じて下さったのですね？」

「…うるせえ…所長の務めだ。」

「嬉しいです。」

彼女の顔が、赤らむ。

「まずいな、依頼断つちまつた。」

「きっと大丈夫です。藤田さんが、何とかしてくれていると思います。」

俺は、彼女の頭をくしゃくしゃと撫でると、

「戻るぞ。」

と、再び別荘に入った。

「いやあ、西園寺君済まなかつたねえ。」

俺達が応接室に入ると、男爵はわざわざ立ち上がりつて謝罪の言葉を述べてくれた。

「いえ。私の方こそ、失礼な態度を取つてしまい、申し訳ありませんでした。」

「いやいや、それも彼女を思ん図つての事だらう?..」

再び全員が席に着くと、藤田が報告する。

「所長、大鳥邸潜入内偵の許可を頂きました。市村と私は使用人として。所長には、客人として大鳥邸に入つて頂きます。眞吾には、外との連絡、調査に当たらせます。」

「わかった。」

「それでは、西園寺君。宜しく頼むよ。」

そう言つて立ち上がつた男爵は、右手を差し出した。

「わかりました。宜しくお願ひ致します。」

そう言つて立ち上がつて男爵の手を握つた途端、俺の視界は暗転した。

「トシー。」

「西園寺君!..」

皆の呼ぶ声が聞こえる。

「西園寺さん!..」

彼女が、泣きながら叫ぶ声が…。
泣くなよ、俺は大丈…夫…。

「こんな馬鹿騒ぎ、やつてられるか!今は、こんな事しての場合じ

やねえだらうがつ!..」

「気持ちは分かるけど、もう少し上や周囲も立ててくれないかな?..」

雪道をズカズカ軍靴で踏みしめ、宿舎に帰ると荒々しくドアを開ける。

「お帰りなさい。」

そう言う彼女に一警して、俺は続いて入ってきた大鳥さんに言った。

「俺は、もう絶対に出ねえからな！」

「何かあつたんですか？」

「ああ、今日の祝賀会がお気に召さないんだよ、彼は。」

「ふんっ！俺は、其れよりも今遭らなきやいけねえ事が…。」

大鳥さんは手を広げて首を振り、彼女はクツクツと笑いを噛み殺している。

「君が酒を飲めないのは、知っているけれどね。」

「大鳥さん、俺は飲めないんじやない。飲まないんだ！」

「全く君は…。まあいい。その代わり、全ての戦いが終わったら、その時は僕と杯を酌み交わす約束をしてくれるかい？君とは一度、ゆっくりと飲みたいからね。」

「ああ、いいぜ。その時には、浴びる程飲んでやるよ…。」

月の明かりが眩しくて、目が覚めた。

何処だ、此処は…？

起き上がるとした時、ベッドの横に俺の手を握ったままうたた寝をしている彼女が居る事に気が付いた。

第4章（2）

俺は、自分が倒れた事を思い出した。
寝ている彼女の髪を撫でる。

心配させちまつたな。」

小さなノックの音がして、灯りを持った男爵が顔を出した。
「起きていたのかね？」

彼女が寝ている事を気遣つて、小さな声で囁く。

「少しいいかね？」

俺は頷いて、ベッドを出た。

そして、寝ている彼女を抱え上げ、今迄自分が寝ていたベッドに寝かせ、布団を掛けてやる。

男爵は、何も言わずに灯りを持つて待っていた。

自室に招かれた俺は、男爵に失態の謝罪と礼を述べた。

「医者が、熱中症だと言つておつたよ。昨日は暑かつたし、君を興奮させてしまったからね。」

「ウチの者達は？」

「藤田君と川崎君は、帰つたよ。」

あの後、再び藤田と話し合い、明日藤田は本邸に入り、彼女は別荘で雇つたという事にして、一週間後に男爵と俺と三人で本邸に乗り込む算段だという。

「君は、優秀な部下を持っているね。」

「いえ、ウチの者達に上下は有りません。皆、仲間ですから。」

男爵は、目を細めて言った。

「そういう所は、相変わらずなのだねえ。」

「は？」

「いや…君の仲間達は、本当に君の事を慕つてこるよ。」

と、につこり笑つた。

「彼女と、知り合いだそうですね。」

「ああ、古い知り合いでね……。」

「どの様な知り合いか、お聞きしても宜しいですか?」

「彼女は、何も話してはいないのか?」

「はい。」

「そうか……。君が疑つた様な関係では無いよ。彼女は、私の大切な友人だ。ある時を境に、ふつつりと消息を絶つてしまつてね。八方手を尽くして探していたんだが、正直生きているかさえも諦めていたんだ。」

遠い眼差しをしていた男爵は、俺に向き直り、

「君は、あの子が好きなのかね?」

と、聞いた。

「あ……いえ……彼女は、ウチの従業員で……仲間ですから。」

「でも、憎からず思つているのだろう?」

何もかも見透かす様な男爵の目に、俺は何も答えられなかつた。

「今から40年程前になるか……維新の頃、私には共に戦う友人がいてね。戦う為に生まれて来た様な男だったが、その男にも想い想われる相手がいたんだ。」

「……?」

「その女性との幸せな生活を送る事も出来た筈なんだが、周りの信頼を一身に集めていた友人は、皆の想いを掲げて、そして一人で散つてしまつた。残された女性の嘆き悲しみ様といつたら……我々の胸は、えぐるられる様だつたよ。」

「……。」

「西園寺君、女性を泣かせてはいけない。如何なる時にもだ!泣くのは……男だけで良いんだよ。」

真つ直ぐ向けられていた男爵の目が、ふつと和らいだ。

「彼女、泣いていたよ。君が倒れたのは、自分のせいだと自らを責めてね……。君の仲間達が、なだめるのに大変だつたんだ。あんな彼

女を見たのは、久々だった。」

「…ですか…。」

「老人からの忠告だ。自分の心に素直になりたまえ。常に、一番大切なのは、何かを考えるんだ。」

「…はい。肝に命じます。」

「うちの孫達にも、君達の様な仲間が出来れば良いんだが…。」

「瑠嘉君の話は、聞いています。」

「あれも、色々思う所が有ると思つたが、感情を面に出さない所があつてね。」

「母親は？」

「子供を産んすぐに、本国に帰ってしまった。異国の生活は、耐えられなかつたのだらう。」

「そうですか…。」

「…君の若い頃の武勇伝は、聞いているよ。かなり無茶をした様だね。」

「若氣の至りです。」

「妙なきつかけだが、交流を持つてみてはくれないか？」
「わかりました。」

一週間後、俺達は本邸に向かつていた。

俺達の素姓を知っているのは、執事と家政婦長だけだという話だ。本邸に着くと、主人を出迎える為に屋敷の者が一同に整列していた。車を降りると、彼女はスッと奉公人の列に加わり、主人を出迎える為に深々と頭を下げる。

帰宅の挨拶をする執事に、男爵が、「こちらは、西園寺歳文氏だ。暫く当家に滞在してもいいので、取り計らう様に。」

と、言った。

宜しくと挨拶をし、執事の隣の藤田と田配せをする。

客室に案内した藤田が、荷物を運んで入つて來た。

「執事見習いが、板に付いてるじゃねえか。」

「恐れ入ります。」

「で？ 今迄にわかつた事は？」

「大鳥男爵の家族は、長男の奥方大鳥環30歳、その息子稔5歳。次男の息子瑠嘉12歳。以上です。使用人は、執事、家政婦長他メイドが8名、雑役夫が1人です。事件のあらましと、奉公人の履歴については、此方に…。」

と報告書を出した。

「素行に問題がある者は？」

「あえて言うなら、環でしょうか？ 夫の死後、社交場で浮き名を流している様ですね。」

「使用者は？」

「取り立てて、問題無いと思います。」

「その後、子供達の様子は？」

「特に何も… 但し、性格がかなり屈折してます。」

「そうか…。」

「報告は、以上です。夕食は、食堂にて6時からになります。」

「わかった。建物の看取り図があつたら借りて来てくれ。後は、市村を助けてやつてくれ。」

「承知致しました。お客様。」

そう言ひうと、深々と一礼して藤田は退室した。

あいつ、すっかり成りきつてやがる。

夕食まで、まだ間がある。

おれは、報告書に目を通した。

最初の被害者は、5歳の稔。饅頭を食べたところ苦しみ出し、直ぐに医者の手当でがされ大事に至らなかつた。

饅頭には、猫いらずが入っていたらしい。

2番目の被害者、瑠嘉が被害にあったのは、同日の夜。自室に置かれた水注しに、同じ様に猫いらずが混入されていたらしい。

症状としては、瑠嘉の方が重かつたらしく、一時は死線もさまよつた様だ。

猫いらずが置かれていたのは、屋敷の物置。誰でも入手可能だった。

それ以降、事件は起きていない。

ノックの音が聞こえ、返事すると、

「失礼します。」

と彼女が入つて來た。

黒い詰め襟のワンピースに、ひだの付いた白いエプロン。

同じひだの付いた帽子を被りつたメイド姿が眩しい。真吾が見たら、大喜びしそうだ。

「此方をお持ち致しました。」

と、屋敷の見取り図を差し出す。

「問題は、無いか？」

「はい、今の所特に。」

「わかった、引き続き頼む。」

彼女は、深々と一礼して退室する。

藤田の奴、彼女を見せる為にわざと寄越しやがって……ったく。そろそろ時間だ。

俺は、食堂に向かつた。

食堂に入ると、男爵が俺を紹介してくれた。

席に居たのは、環と稔。

瑠嘉は、体調が万全では無いという事で、自室に居るらしい。

薄紫の綿子の着物に金糸の帯、髪を大きく結い上げた環は、自分が魅力的であるという事を十分知っているという様な女だった。

「西園寺さんって、西園寺公の……？」

「不肖の息子です。」

「まあ、やはり。市井にいらっしゃるという噂は、聞いておりましたのです。でも、こんな素敵な方だと存じませんでしたわ。」

「恐れ入ります。」

「後程、サロンの方で、一杯如何ですか？」

「喜んでお付き合い致しますよ、奥様。」

隣に座る稔は、先程からチラチラと此方を盗み見ている。目を合わすと、はにかんで俯いてしまった。

食後、藤田にサロンまで案内され、紅茶を飲んでいると、今度は真っ赤なサテンのドレスにショールを羽織り、髪を下ろした環が登場した。

のつけから挑発するつもりか……鬱陶しい……。

藤田が耳元で囁く。

「短気を起こさないでください……。」

わかつてらあ。

「ご機嫌よう。西園寺さん。」

俺は、立ち上がって一礼する。

彼女はクルリと回ると、

「如何かしら、このドレス。亞米利加国から取り寄せただけれど。

「とても素敵ですよ。奥様。」

藤田は黙つて2人分の洋酒を用意し、静かに出て行った。

「西園寺さんは、何をしにこの屋敷にいらしたの？」

隣に座つた環は、杯を上げると俺の顔を覗き込む。

「男爵の此迄の功績や、『ご家族の事を出版しようと思いましてね。取材をさせて頂いているのですよ。』

「まあ、それでは、私達の事も？」

「そうですね…出るかもしません。」

「この屋敷の事なら、私が一番詳しくてよ。」

「それでは、最近の事ですが、御子息が事故にあわれたそうで…。」

「あら、あの事も書くの？」

「一応、取材ですから。」

「そう…稔が饅頭食べたら、腹痛を起こしたのよ。」

「その饅頭は、どういう経路で稔君に？」

「さあ？誰かから貰つたんじゃ無いかしら？あの子、食いしん坊だから。」

「貴女が、与えたのでは無いのですね？」

「違うわ！私は…その時、外出していたし…。」

「その夜、瑠嘉君も大変だつたとか。」

「ああ、瑠嘉ね。あの子は、度々問題を起こして皆を困らせるのよ。質が悪いの。あの姿に入殺しでしちゃう？まるで、悪魔の子よ。」

「人殺し？どういう事です？」

「…」これは、内緒よ。あの子は、義理の母親と、お腹の中にいた義理の兄弟を殺したのよ。」

「それは、それは…。」

「表向きには、事故つて事になつてているけどね。あの子がやつたのよ…私見たもの…。」

「何をご覧になつたのです？奥様。」

「あの子が、死体の側に立つていたのよ。私が悲鳴を上げると、あの子走つて逃げ出したのよ。それって、犯人つて事でしちゃう？」

「さあ、どうでしょうね？」

殺人未遂事件を調べていて、とんでも無い殺人事件迄出て来るとは…。

「私ね、西園寺さん。この家、嫌いよ…。」

そう言つて環は、俺の首に腕を回す。

「酔られたのですか？奥様。」

「老人と子供だけの家に、何があるというの？私は、まだまだ女として輝けるのに、跡継ぎである稳に縛られて、この家を出る事も出来ない…。」

環は、俺の胸に顔を埋める。

彼女の香水が、俺にまとわりついた。

「酔いが回られた様だ。今宵は、此処までに致しましょう。」

そう言つと、俺は彼女の腕を外し、立ち上がって一礼する。

「そうね…。また、付き合つて下せる？西園寺さん？」

「勿論です。奥様。」

環は、嫣然と微笑み、俺を残して部屋を出た。

第4章（3）

入れ違いに、藤田と彼女が入って来る。

「お疲れ様です。大した猫被りでしたね。」

「ああ、疲れたぜ…。俺も、社交界と全く縁が無い訳でも無いからな。あれ位の対応なら、まあ何とかな…。」

そう言うと、俺は煙草を出した。

すかさず、彼女が火を付けてくれる。

普段そんな事をしない彼女の行動に、少し戸惑い、

「…済まない。」

と言つが、彼女は何も答えぬまま一礼した。

「何か、情報は？」

「稔が食つた、饅頭の出所が分からぬ。あと、瑠嘉の義理の母親が、妊娠中に亡くなつてゐる。瑠嘉が犯人かも知れないという話だつた。」

「わかりました。双方情報を集めます。」

「宜しく頼む。」

俺はソファーに身を沈め、紫煙を吐いた。

「市村が、瑠嘉の担当になりました。」

「そうなのか？」

俺は彼女に視線を移したが、彼女はテーブルの上を片付け、そのまま退室した。

「？」

「今夜、初めて接触したそうですが、余り良い感触では無かつた様ですね。」

「それで、気にしてるのか？」

「いえ、その様な事は無いと思いますが…。」

「そうか…。」

屋敷内に居る時には、あくまでもメイドとして対応するつもりなの

だらう。

翌日、昼食が終わって庭を散歩していると、先生の上に這いつぶつて
つている彼女を見つけた。

「何をしている?」

声を掛けると、驚いた様に顔を上げた。

その時、

「何をしている、さつまと集めろー」と
と言つ子供の声。

見ると、東屋に少年が座つていた。

髪は、金色に近い栗毛。白い肌に赤い唇、そして金茶色の目。

少年は、俺を見ると立ち上がつた。

「はじめまして、西園寺さんですよね?僕、大鳥瑠嘉です。宜しく。

「宜しく、西園寺です。体調は如何ですか?」

「ふふふ、嬉しいな。貴方は、僕を大人として扱つてくれるんですね?ありがとうございます。もう、大丈夫なんですね。」

瑠嘉は、そう大人びた挨拶をした。

「ところで、彼女は何をしているんです?」

「ああ、あれは落とし物を探しているんですよ。」

「落とし物?」

そう話している所に、彼女がやつて來た。
服も手も、泥で汚れている。

「坊ちやま、探して参りました。」

そう言つて見せたのは、緑色のビードロ玉。

彼は、その玉の数を数える。

「…18、19、20。うん、全部あるね。なんだ、泥だらけじゃないか。じゃあ、綺麗に洗つて来るといいよ。」

そう言つと、今度は池の中にビードロ玉をばらまいた。

そして、顎をしゃくつて彼女に命じる。

彼女は、何も言わずに池の中に入り、ビードロ玉を探し始めた。

何て事しやがる！

俺は、怒鳴りたい衝動を抑えて、務めて冷静に言った。

「酷い事を成されるのですね。」

瑠嘉は、ふふふと笑うと、

「あれは、昨日きたメイドなんだ。僕の所有物だもの。僕に従順じやないとね。」

「テストなんですか？」

「そう！ わかつてるじゃない。先ずは、第1関門は突破したんだ。

だからこれが、第2関門。」

「因みに、第1関門は？」

「聞きたい？」

と、瑠嘉は薄く笑った。

「ええ、是非…。」

「タベね、テストしたんだ。服を全部脱がせてね、ベッドに入る様に言つたんだ。」

嫌な予感が的中した。

俺は、後悔しながらも話を聞いた。

「あの女、悲しそうな顔して裸になつてさ。でも、体中傷だらけなんだよ。背中なんか凄い傷でさ。思わず痛かつた？ って聞いたら、黙つて抱き締めてくれてさ…。」

「…。」

「あんな女、初めてだよ。大概大騒ぎするか、体を投げ出して來るのに、あの女、僕の髪撫でて子守唄歌つんだもの。」

「それで？」

「なんだあと思いながら、気持ち良くて寝ちゃつたよ。」

俺は、内心安堵した。

「コイツは、あくまでも子供なのかもしない。」

「テストは、いくつ有るのですか？」

「後、1つ。大概、2つ目で音を上げるんだけどね。」

「3つ目の時も、是非同席させて頂けますか？」

「ああ、いいよ。でも多分、数日掛かると思うよ。池の中のビーチ口玉なんて、そうそう見つからぬからね。じゃあ、そろそろ僕は失礼します。」

「見ていいなくて、良いのですか？」

「あの女は…ズルしたり、人の手を借りたりする女じゃ無いと思つよ…あなたは、手伝いたそุดけどね…。」

そう言うと、ふふふと笑つて邸内に入つて行つた。誰も居なくなつたのを確かめて、彼女に声を掛ける。

「大丈夫か！」

池の中で這いつくばつた彼女は、顔を上げ頷いてみせる。

「待つてろ、俺も行く。」

彼女は、慌てて大きく被りを振り、

「駄目です！」と拒否をした。

確かに、ここで瑠嘉の信頼を勝ち得る事は、必要かもしない。しかし…。

「大丈夫です。」

彼女は、キッパリと言つた。

「…無理するな…。」

そう言つて、俺は藤田の所に行き、事の顛末を話した。

「風呂と、着る物を用意してやつてくれ。」

「了解しました。」

「それと…夜遅くても良いから、俺の部屋に来る様に言つてくれ。」

「承知しました。」

しかし、その晩も次の晩も、彼女の現れる事は無かつた。

彼女の池さらいは、3日間を要した。

4日目の晩、俺は瑠嘉に呼び出され、庭の東屋に行つた。

テーブルの上には、小さな器にビードロ玉が入っている。

「見てよ、西園寺さん。彼女、全部集めて来ちゃったんだよ。」

「その様ですね。」

「今まで、このテストにちゃんと合格した者は居なかつたんだけどね。」

「ちゃんと、とは?」

「助つ人呼んだり、探したふりしてビードロ玉買つて来たり……。」

「成る程。」

「でも、彼女は自分一人で探したみたいだよ。夜中も池に入つてたからね。ふふふ。」

この野郎!と思ひながら、平静を保つ。

そこへ、彼女が紅茶を入れたカツプを3客運んで來るのが見えた。

「このテストは、通つた者が居ないんだ。」

瑠嘉はそう言つと、俺にウインクした。

彼女が東屋に着くと、瑠嘉は優しい声を出して言つた。

「桜、本当にご苦労だつたね。僕の大切なビードロ玉を見つけてくれて、ありがとう。何かお礼をしたいんだ……。そうだ、ちょっと待つてくれる?」

そう言つて、東屋の裏手の花壇に入つて行つて、一輪の大きな花を摘んで来た。

あの紫の花は……!

「綺麗でしょ?僕、この花好きなんだよ。知つている?トリカブトつて言つんだ。」

そう言つと、摘んだばかりの茎を握り締める。

茎からポタポタと雫が滴り落ち、下に置いてあつた紅茶の中に入つた。

「この花を君に送らせてもらつよ。でも、気を付けてね。この花、猛毒なんだ。牛なんかも、口口と死んじゃうんだつて。」

そう言つて、彼女に花を渡す。そして、こう言つた。

「僕等のこれから信頼の証に、一緒に杯を上げようよ。お酒と言

う訳にいかないから、紅茶で…ね、いいでしょ？

そつ言うと、トリカブトの葉の入った紅茶を、彼女に勧める。

彼女は、じつと瑠嘉の顔を見ていた。

「…馬鹿馬鹿しい、止める！」

「西園寺さんは、黙つててよ。これは、桜と僕の信頼の話なんだから。

悲しそうな顔をして、桜はなおも瑠嘉を見つめる。

「やつぱりね、みんな嘘ばかりさ。誰も僕を信じしゃくれない。お前も、他の皆と一緒にさ！さあ、出て行けよ！」

そう瑠嘉が叫んだ時、彼女はカップを持ち上げた。

「あ…桜…だ…」

「止める…！」

俺が叫ぶのと、彼女が紅茶を口に運ぶのが一緒だった。

次の瞬間、俺が彼女のカップを叩き落とすと、彼女が紅茶を飲み込むのが、スローモーションの様に見えた。

カップが落ち砕け散つた瞬間、彼女の体がのけぞる。

「くそつたれ！」

俺は、彼女を抱えると、指を彼女の口に入れて紅茶を吐かせにかかる。

「吐いちまえ！胃の中の物、全部吐くんだ！」

そして、怯える瑠嘉に向かつて怒号を吐く。

「馬鹿野郎がつ！！一体テメエは何やってんだ！」

「あ…あ…ぼ僕…」

「すぐ大人を呼んで来い！それと、医者と水だ！急げ！」

瑠嘉は、足をもつれさせながら、邸内に走つて行く。

俺は、残つた紅茶を彼女に無理やり飲ませ、また口に指を入れて吐かせる。

彼女の体が震え、痙攣を繰り返す。

「お前も、馬鹿野郎だ！桜、しつかりしつつー吐くんだ！」

邸内から、藤田が走つて来る。

「口にした毒は？」

「アコニチンだ。胃洗浄しか手はねえ！」

「水を！」

水さしの水を飲ませぬにも、彼女は歯を食いしばって飲めた状態じゃない。

藤田と額き合いつと、彼女の口を無理やり開けて、水差しから大量の水を流し込み、彼女を抱えると胃を押さえて無理やり吐かす事数回。

「今、俺達に出来るのは此処までだ。」

「医者には、既に連絡を取りました。」

「わかった。」

そう言いつと、俺は遠巻きに様子を伺う瑠嘉の元に行くと、有無を言わさず平手打ちを食らわせた。

「つづ！」

「命を賭事なんかに使うんじゃねえ。信頼が欲しけりや、信頼に足る行動を自分がしてからほぞけー！それから彼女は、お前の玩具じやねえ！よく覚えておけッ！」

頭の上から、どなり散らした。

「西園寺様！」

藤田が叫ぶ。

彼女は、呼吸困難を起こしていた。

「まずいな…。」

俺は、彼女の胸元を緩めると、抱え上げた。

「俺の部屋に運ぶ。」

瑠嘉が、走り寄る。

「ぼつ、僕の部屋に…。」

「何…？」

「さつ、桜は、僕の物だ…。」

「お前、まだそんな事…。」

「いやだ！桜は僕の物だ！桜は、桜は…。」

「…わかった。お前の部屋に案内しき。藤田、家政婦長に彼女の着

替えをさせる様連絡しろ。後は医者が来たら、瑠嘉の部屋に寄越せ。

「承知致しました。」

第4章（4）

家政婦長がやつて来て、彼女を使用人部屋に移すと言つても、瑠嘉は頑として自分の部屋で面倒を見ると、きかなかつた。

流石の家政婦長も諦めて、着替えさせるから退室する様に言つても聞かなかつたが、これは俺が抱えて連れ出した。

「何するんだよ！僕は、桜に付き添うんだ！」

「だから、着替えるつて言つてるだろ？が！」

「大丈夫だよ！僕は、桜の裸見てるもん。」

「馬鹿野郎！そんな事、べラベラ喋るんじゃねえ！」

「そうなの？」

「ああ、やっぱりコイツはガキだ…。

「彼女の名譽の為だ。黙つとけ。いいな？」

「…わかった。」

と、素直に頷く。

そこに医者が到着したので、引き続き俺達は廊下で待機していた。しばらくして、招き入れられる。

「胃洗浄をしたのが早かつたので、良かつたですね。適切な処置でした。今の段階では、このまま様子を見るしかありません。急変する様であればご連絡下さい。直ぐに参ります。」

「わかりました…。」

「それについても、一体何があつたというのです？アコニーチン中毒ともなれば、私も警察に届けなければならぬ。」

「事故です。」

「俺は、言った。」

「トリカブトの花と知らずに摘んだ花束の雫が、飲み物の中に混入してしまった様です。私が見ていたので、間違いありません。」

「そうですか…わかりました。」

訝しが様子を見せたが、医者は何も言わず帰つていった。

家政婦長は、俺に深々と礼をする。

「瑠嘉が駆け込んだ時に、誰がその場に居ましたか？」

「丁度、執事と藤田と私だけでした。」

「そうですか。それでは、一切他言無用に願います。彼女は、池さらいで熱が出たとでも…。」

「承知致しました。ただ、旦那様だけには報告をせて頂きます。」
そう言つと、部屋を出て行つた。

「僕を…庇つてくれたの？」

「馬鹿野郎、彼女を庇つたんだよ。」

「え？ だつて…。」

「確かにお前は、力ップにトリカブトの雫を入れた。だが、それを毒と知りつつ飲んだのは、彼女の意志だ。」

「…。」

「それに、ガキを守るのは、大人の仕事だ。」

「やつぱり、僕つてガキだよね…。」

「自覚してりやあ、それでいい。」

瑠嘉は、寝ている彼女の手を握り、俺に聞いた。

「どうして桜は、毒つて分かつて飲んだの？」

「…お前の事を、愛してるからに決まってるだろつ。」

「僕を？ だつて、僕は桜に酷い事ばかり…。」

「彼女は、お前の心の叫びを聞いた。狂おしい程愛して欲しいと叫ぶ声をな。だから、答えた。自分もお前を愛していると。」

「…。」

「お前は、自分が叫ぶばかりで、聞こうとしてねえんだよ。さつきの家政婦長だつて、執事だつて、皆お前を愛してる。」

「…お祖父様も？」

「男爵が、一番お前を愛してるだろうが。」

「…そなんだ。僕はてっきり、皆に疎まれているとばかり思つた…。」

「やつぱり、ガキだな。」

「だつて、環伯母様は僕の事…悪魔の子つて…。」

「…あれば、誤解してるんだ。」

「僕はね…、僕の事を好いてくれているのは、稔だけだと思つていたんだ。稔はまだ小さいから、何も分からぬからね。僕の髪も目も、稔だけは気味悪がらなかつた。」

「…。」

「桜はね、最初の晩、僕の髪を撫でながら、綺麗ですねって言つてくれたんだ。僕の目も、お日様色の綺麗な目だつて。自分は、月の明るい、満天の星空を切り取つた様な色をした瞳も好きだけど、キラキラ輝くお日様色の僕の瞳も好きだつて…。あれ、貴方の事でしょう?」

俺は、自分の目を押さえて聞いていた。

「…かもな。」

「お祖父様に聞いたんだ。貴方、僕と同じなんだつてね。」

「ああ。」

「苦しくなかつた?自分が1人だと、思わなかつた?」

「苦しくなかつたなんて言わない。嘘になつちまうからな。でも、俺には赤ん坊の頃から俺を愛してくれる乳母が居たんだ。それに、ガキの頃からのダチも居たのが大きかつたな。」

「ダチ…友達だね?でも、僕には出会う機会が無いよ。」

「一応、社交界で出会つたんだぜ。」

「えつ?」

「いきなり、向こうから喧嘩ふつかけて来たんだがな。その理由が、何だか気にいらねえっていうんだから、笑つちまう。」

「へえ…。」

「俺もこんだから、社交界に顔出すのは億劫でな。でも、売られた喧嘩は買ってやるっていう、負けん気の強さは人一倍でな。それからは、喧嘩する為に社交界通いしたもんさ。お陰で、2人して鼻つまみ者さ。」

「喧嘩していく、仲が良いの?」

「ああ、あれはいつだつたかな？余り社交場ばかり荒らすのもって事で、俺んとこの別邸でな……」

「どうだ、何故思い出さなかつた？」

この間、キヨが話してくれた伊豆の別邸の姉やの話。

俺達が喧嘩していた時、勢い余つて深い池に落ちちまつて。

慌てて姉やが飛んできて、2人を助けてくれた。

その後、一緒に風呂に入れられ、飯を食わされ、昼寝まで一緒にさせられ……昼寝から起きて、スイカを食べながら

「まだ続けられますか？」

つて聞かれて、流石に馬鹿馬鹿しくなつて……。

あれから、何をするのも真吾と一緒にだつた。

キヨに話を聞いた時は、うろ覚えだつたが、こうして思い出すと、彼女にそつくりだ。

といふか、生き[写]じじゃねえか！

「西園寺さん？」

「ああ、いや……。」

「今も、仲が良いの？」

「ああ、腐れ縁だ。ずっと一緒に居る。」

「僕にもね……小さい頃は、すごく優しくしてくれる人が居たんだ。色の白い、細い指の人だった。僕の兄弟を産んでくれるつて言つたんだ。」

「……。」

「僕達は、手を繋いで庭の階段を上つてた……。もう直ぐ上りきる所で、僕は……僕は躊躇して……。」

瑠嘉は、涙声になりながら、必死に続けた。

「僕を支える為に……今度は……その人がバランスを崩して……。僕は、

その人の手を必死でひっぱつた！でも……その人は……僕の手を離したんだ。」

そういう事か。

瑠嘉の目から、大きな涙が溢れれる。

「階段から落ちたその人は、いっぱい血が出てた。僕はびっくりして……あの人は……大丈夫……僕のせいじゃ無いって……その時、叫び声が聞こえて……僕は……僕は……」

瑠嘉は、とうとうしゃくりあげて泣き出した。

「それは、お前のせいじゃ無い。」

「でも……」

「それは、その人が大人だったから、子供のお前を守ったんだよ。」

「えっ？」

「その人は、手を離したんだろう？手を繋いだままだと、お前も一緒に落ちちまう。だから、お前を守る為に手を離したんだよ、お前のお義母さんはな。」

「あ……」

「お前は小さ過ぎたんだ。その事を誰かに話していれば、大人は分かつてくれただろうに。怖くて誰にも話せなかつたんだろう。」

瑠嘉は、頷く。

「これからは、誰かに何でも話すんだな。」

「桜がいる。これからは、桜に話すよ。」

俺の胸は、チクリと痛んだ。

捜査が終われば、彼女は屋敷から出て行く……

「男爵に聞いて貰うといい。」

「お祖父様に？」

「メイドに話すのもいいが、身内が一番だしな。それに、お前の立場、身の処し方、一番分かってくれて、適切な助言をくれるのは、男爵だろう。」

「そうか、そうだね。男同士だしね。」

「そうだ。」

「貴方にも相談していい？」「えつ？」

「僕、貴方にも相談したい！お兄様みたいで…駄目？」「えつ？」

「ああ、構わないが、俺に適切な助言が出来るとは思わないがな。」「良かつたあ！」

ノックの音がして、藤田が顔を出し、男爵が呼んでいる旨を伝えた。
「瑠嘉、彼女を頼んだぞ。もし様子がおかしくなつたら、直ぐに藤田か家政婦長を呼ぶんだ。」

頷く瑠嘉と彼女を残し、俺は部屋を出た。

「所長、自分が残つた方が良かつたのでは？」

藤田が、小声で尋ねる。

「いや、大丈夫だ。彼女も、大分落ち着いた様だしな。」

「西園寺君、済まない。彼女の様子は、どうだね？」「大分落ち着きましたので、ご安心を。」

「一体、何が起きたか話してくれるかね？」

俺は、事の顛末と、その後の瑠嘉との会話を男爵に話した。

「君に偉そうな事を言つておきながら、私は彼女を危険に晒してしまつた。本当に申し訳無い。」

「彼女を、誓めてやつて下さい。彼女は、瑠嘉の心を救つた。」

「それは、君にも言える事だよ。本当にありがとう。」

「これからは、男爵の力です。アイツの心は、愛して欲しくて血を流している。思い切り、愛してると伝えてやつて下さい。抱きしめて、間違つた時には、叱つてやつて下さい。アイツは、瑠嘉は、ただの子供だ。」

「そうだな…心で思うだけでは、伝わり様が無いな。」「今の瑠嘉に必要なのは、男爵の愛情と、友達です。」「うむ…。」

「男爵は瑠嘉の将来を、どうお考えですか？市井に出すおつもりですか？」

「彼の希望も有るだろうが、私はその方が良いと考えている。」

「ならば、最初から市井の者達と触れ合いを持たせるのも、良いかもしれません。」

「それならば…」

と、藤田が口を挟む。

「道場通いは、如何でしよう？」

「その手があつたか！」

「はい。私の父は、市井で小さな道場を行っています。かなり厳しいのですが、其方で良ければ紹介出来ます。ただし、無党流ですが…。」

「失礼だが、お父上は？」

「藤田五郎といいます。以前、男爵が蝦夷地で御一緒だつた方と、昔京都で一緒に働いておりました。」

「何だと…」

その反応に、俺の方が驚く。

「その頃の…お父上は？」

「斎藤」という名前で、市中見廻りを仕事としていた様です。「三番隊の斎藤君か！確かに彼とは、会津で別れたと言つていた。」

「はい。」

「そうか、彼も生き延びたんだね。わかつた。間違いあるまい。瑠嘉にその気があるならば、是非ともお願ひしよう…。」

「承知しました。」

男爵の部屋を辞した俺達は、再び瑠嘉の部屋に向かって歩いていた。

「お前の親父さん、そんな凄い人物だったのか？」

「父は維新の頃、男爵と同じ旧幕軍だったんです。たまたま同じ知り合いが居ただけの話です。」

「そうか…。そういうえば、この間男爵から、維新の頃の友人の話を聞いたつけな…。」

斎藤一…三番隊…。

何となく聞き覚えがあつたんだが…氣のせいいか?

おれの父は新政府軍側だったから、旧幕軍時代の知り合いが居るとは思えない。

最も今じゃ、入り乱れているが…。

第4章（5）

部屋に戻ると、彼女の傍らに瑠嘉が寝ていた。

彼女は、起きて瑠嘉に布団を掛けようとしている。

俺は藤田に、瑠嘉を俺の部屋で休ませる様に指示をして、自分は彼女の枕元に座つた。

藤田は、瑠嘉を抱え上げ、そつと出て行く。

2人きりになると、重苦しい沈黙が続いた。

「何故だ？」

先に口を開いたのは、俺だった。

彼女は、何も答えない。

「答える！ 桜！！ 何故飲んだ！」

俺は、彼女の肩を掴み揺すつた。

「俺は…お前を雇う時、自分の命を大切にしろと言つたよなあ！ その約束を守らないってんなら、お前を雇つておく事は出来ねえ！」

「…すみません。」

消え入りそうな声で、彼女は謝る。

まだ体調が戻っていないのだろう。血の氣の失せた顔が、余計に白くなる。

彼女の顔を見ると、気遣う気持ちより、俺は自分の中の怒りを抑える事が出来ず、彼女を乱暴に布団に投げ倒した。

布団に倒れた彼女は、そのまま涙を流す。

「俺は、仲間が傷付く事が何より嫌いなんだ！」

夕日がベッドまで差し込んで、彼女の背中を赤く染めた。

「…お前まさか、死にたいとかつて思つてるんじゃないだろ？ な？」

彼女は、ビクツと体を痙攣させた。

「お前が、自分はどうでもいいって思つてゐる様に見えるのは… 全てを投げ出してもいいって見えるのは、俺の気のせいだよな？」

「…」「…」

「俺達の所に来た時の、生きる事にも誇りの為にも、あがらう氣持ちを無くしちまったのか？なあ、俺達の所に来たのは、間違いじゃねえよな？」

再び彼女を抱き起こし、彼女の身体を揺すつた。

「なあ、お前の未来の夢って何だ？それは、生きる糧にはならないのか？」

「…私の…ずっと長い間…思っていた夢は…もう…叶つてしまつた…から…。」

そう息も絶え絶えに言つと、彼女の意識は切れた。

「さくらー！」

彼女の体は、グニャリと俺の腕の中に落ちる。

その身体を抱き締めて、俺は呟いた。

「未来を…お前との未来を夢に見るのは、俺だけって事がよ…。」

彼女を寝かせると、俺は深いため息を付いた。

彼女は、俺達の所に来て楽しそうに生活をしていたし、甲斐甲斐しく世話も焼いててくれた。

決して、無気力になる様な生活は、していいはずだと信じたい。

「願いが叶つたって、何だよ…！」

岩崎邸を辞める事が、出来たって事か？

そんなちつぽけな物か？

こんな時は、奴に無性に会いたくなる。

俺は事務所に連絡を入れ、真吾に迎えに来てもらひつ事にした。

「夜には戻る…。」

そう藤田に言つと、俺は上着を持つて大鳥邸を出た。

「…事務所、戻るか？」

車に乗り込むと、何かあったのを察した様に真吾が聞いた。

「…キミは？」

「一昨日から湯治に出でしやつた。戻りは、明日だ。」

「…事務所にやつてくれ。」

久々に戻つた事務所のソファーに、俺は横たわる。羽虫が一匹、電灯の周りを飛んでいた。

真吾は黙つて、俺の前に日本茶の入つた湯飲みを差し出した。

「…桜が…毒を飲んだ。」

「ああ、藤田から電話で聞いた。顛末も含めてな。」

ソファーに座り直し、額の前で両手を組んで、俺は話しを続けた。
「俺は…桜が飲むのを、分かつていたんだ。なのに、止められなかつた…。」

「…。」

「あいつ、此処に来て変わつたよな？」

「そうだな。明るくなつた。毎日が、楽しそうに見えるぜ。」

「いや、何ていうか…満足仕切つて、もうこれでいいつて思つちまつてる様な…。」

「?満足なら、良いじやねえか。」

「そうじや無くて…あいつ、全てを投げ出しちまうんだ。自分の守つた来た誇りも、命も…。なんか、もう死にたいっていうみたいに危うくて。」

「それは…。」

「満足しちまつて、もう守る必要が無い様に俺には見える…。」

「…。」

「あいつを此処に置いたのは、間違いだつたんじやねえかつて気がしてな…。未来の夢は、生きる糧にはならないのかつて聞いたら、ずっと長い間思つていた夢は、叶つちまつたんだとよ。何だよ、全く…。」

「で、お前はそれを彼女にぶつけて、一人落ち込んでるつてか?」

二〇〇〇

「それじゃ、言つてやう。お前は、阿呆うだ！」

「何だと？！」

「何度でも言ってやる。阿呆うだ！」

「婆は、幸せなじいだよ。」

様は幸せな人たよ。此處に来て幸せ啼み締めて生きる人た

「だったら……。」

「惚れた男の役に立ちたい。その一心で、毒も煽りやあ子供の我儘にも我慢する。背中を守れる様に、小太刀の練習も再開した。」

- 9 -

「お前、今、藤田を疑つたろ?」

「まあ、藤田自身は、憎からず思つてゐるだらうがな。今のアイツは、

姫を守る騎士様だ。多分、誰かに言われたんだろうよ。」「

「恐らく、桜の小太刀を預かつていいたという人物。そしてそれは、

俺の見る所、十中八九藤田の親父さんだ。
」

一
!

第三章 中国の政治と社会

「ウルトラ...」

彼女の想い人は、お前だトシ。彼女を見てれば分かる。だからこ

「後は、お前が桜の手を取つてやるだけだろう。」

…未来を夢見てるのは、俺だけだ。彼女は、捨てちまつてる様に

「お前なあ

「不安定なんだよ。身体も心も！そんな女を、どうやって捕まえれ

お前なあ

「はい？」

「彼女が危ういのは、全身全靈で物事に当たるからだと、俺は思うぜ。小手先で物事捌く様な女じゃ無いからな。お前…ちやんと、彼女に気持ち伝えたのか？」

「いや…言つちまつと、すり抜けてしまいそうでな…。」「桜が、現状維持を望む気持ちもわかるしなあ…。」

「どういう意味だ？」「

「はあ？トシ、阿呆うの上に馬鹿が付くのか？てめえは？」「てめえ、喧嘩売つてんのか！」

俺は、真吾の胸ぐらを掴んだ。

「ああ、売つてやりあ！」

そつ言つと、真吾も俺の胸ぐらを掴んで対峙した。

「てめえは、忘れちまつてるかもしけねえがなあ…。」

真吾の拳が、みぞおちに入る。

「お前は、市井には下つてるが、れつきとした公爵閣下の『子息様なんだぞ！』

頬に一発拳を食らつと、俺は床に吹っ飛んだ。

「…っ！」

息を弾ませて、真吾は言い放つ。

「身寄りの無い彼女が、手を伸ばせる相手じゃ無い事位、子供だって分からあ！」

久々に真吾に食らつた拳よりも重いものが、ズシンと胸に打ち込まれた。

「…真吾…済まない。」「

「…田え、覚めたか？」「

「ああ。」「

「そいつは、良かつた。」「

そつ言つと、手を差し出し俺を起こす。

「仕事の話だかな？」「

「ああ、聞こう。」「

「環の浮氣相手に、鷹取つて奴がいてな。名前ばかりの貴族様で、内情は火の車らしいんだが、近い内に金には困らなくなるつて、うそぶいてるらしい。」

「うむ……。」

「組関係とも連んでる様で、どいつもきな臭い。」

「何処の組だ?」

「…堂本組。」

「あそこか…。」

武党派の堂本組は、以前俺達が関わった事件に関与し、その折り半壊滅したが、代替わりして又勢力を盛り返して来たと噂で聞いた。

「そつちは、橘さんに連絡を取つて、動きがあつたら封じる様に頼んでくれ。」

「鷹取の方は?」

「それは、こっちから仕掛けてみる。」

「いつものトシらしくなつて來たな。」

真吾はニヤニヤしていたが、急に真顔になつて、

「お前、桜に解雇するつて、口にしちまつたろ?」

「…ぐつ!」

「全く…ちやんと、撤回しとけよ。」

「ああ。」

「じゃないと、彼女…本当に消えちまうぞ。あこつは、こっちの言

葉も思いも、全身全靈で受け止めかけまつんだろうからよ。」

「…分かつてる。なあ…。」

「ん?」

「彼女の…桜の叶つちまつた夢つて、何だと思つ?」

「そんなの、お前と一緒に居る事に決まつてゐじゃねえか。」

「…なんか、おかしくねえか?」

「何が?」

「夢つて、ずっとと思い描くもんだろ?」

「ああ。」

「桜がウチに来て、たかだか2ヶ月だぞ。」

「ああ。だから?」

「彼女…ずっと長い間思い描いていた夢だって言つたんだ。」

「それでも、お前の側に居るのが、彼女の幸せな事に間違いねえんだよ。」

真吾は、そう吐いた。

「俺は…怖いんだよ…俺と一緒に居る事で、彼女が命を縮める事が…」

「お前…。」

「それなら、いつそこの想いを封印して、彼女を送り出してやる方が、彼女の為にいいんじやねえかと思う。」

「…。」

「さつき、お前が言つた様に、彼女が俺の身分で負担に思つてるなら尚更だ。瑠嘉に言つてる場合じやねえ。俺自身が、大人にならなくてどうする?俺は、彼女に女として幸せになつて欲しい…。」

「彼女の幸せの形は、彼女が決めるもんだ。彼女がお前から離れて、幸せになれるとは、俺には思えねえがな。」

「…。」

「馬鹿だから、お前は言つちまつんだろうな…。そして、彼女を泣かす…。」

「そうだな…。」

「言つとくが、俺は女を慰める方法、一つつきや知らねえんだぜ。」

「…。」

第4章（6）

夜半、大鳥邸に戻った俺は、再び彼女の元に戻る。

部屋には、藤田が付いていた。

「あれから一度目を覚ましたが、今は休んでいます。状態も安定している様です。」

「済まなかつたな…。」

「新しい客室を、用意しましょつか？」

「いや、いい。今夜は、付き添う。」

「わかりました。此方に毛布を用意しましたので、お使い下さい。」

「…藤田。」

「はい。」

「ありがとう。」

藤田は、口の端を上げて微笑むと、部屋を出て行った。

彼女は、静かに眠っていた。

胸には、あの懐中時計が握られている。

藤田が持たせてやつたのだろう。

そつとその手に触った時、気配を感じたのか、彼女の目がうつすら開いた。

「済まない、起こしちまったか？」

そして、起き上がろうとする彼女に手を貸した。

「さっきは、済まなかつた。」

彼女は被りを降り、俺の顔を見上げると、少し眉根を寄せて手を俺の唇に寄せる。

当たつた指先が、ひんやりと冷たい。

心配そうに唇の端を触る手を思わず握り締め

「大丈夫だ。ちょっと真吾とやりあつただけだ。」

そう言い、握った手に口付ける。

驚いた様に退こうとした手を握ったまま、もう一方の腕を背中に回

して腕の中へ捕らえる。

「桜…俺は…。」

彼女は、身を固くしたまま聞いていた。

「俺は、お前に側に居て欲しい…。だが、俺の側に居ると、お前は此からも命を投げ出しちまうだろ。」

彼女の髪を撫でながら、俺は続けた。

「俺は、お前が傷付くのを見たく無いんだ。」

そつと身体を離し、彼女は俺の目を覗き込んだ。

「…何を、仰りたいのです？」

「お前は…俺達から離れる。」

彼女の瞳に、絶望の色が広がる。

「…お側には、置いて頂け無いのですか？」

みるみる涙が溢れる。

「俺は、お前に幸せになつて貰いたいんだ。」

「私は、今まで十分幸せです！」

「お前は、このままいいと思つてる…。この先の未来を考えちゃいないだろ。もし、俺が正式に申し込んでも、お前は受けるつもりが無い。違うか？」

「それは…。」

「俺は、女としてお前に幸せになつて欲しいんだ。惚れた男と結婚し、子供を産み育てる…。そんな、当たり前の幸せにな。」

彼女の手が、俺の両頬を包む。

「前にも言つたじゃないですか…。私に女としての幸せは必要無いと

…。」

「桜…？」

「お側に置いて頂くだけでいいんです…。それ以上は、何も望まないと言つたじゃありませんか！なのに…。」

彼女は、支離滅裂な感情を爆発させる。

「貴方は、また私を置いて行つてしまつの…。これ以上貴方を失うなんて、私には耐えられない…！」

「しつかりしる、桜…。」

「嫌です！私に離れると仰るなら、いつそその手で殺して…。」

錯乱状態にある彼女を、俺は抱き締めて言った。

「愛しているんだ、桜…だから…。」

「いやあ、いや…！」

「俺の心は、いつもお前と共にある…。」

「…貴方は、いつもそう…自分の心だけ押し付けて…私は、いつも

置き去りにされて…私の心は、一体何処に行けばいいの…？」

彼女は、ふらりと俺から離れると、ベッドから懐中時計を拾い上げる。

「やつぱり、私には…此しか残されないのね…。」

そう言いつと、俺を振り返らずに言った。

「西園寺さん…何故私を助けたんですか？あのまま逝けたら、私は幸せな一生で終わっていたのに…。」

そう言いつと、部屋のドアを開けた。

ドアの外には、腕を組んだ藤田が壁にもたれたまま立っていた。

彼女は、藤田をも無視して通り過ぎる。

ため息をついで、藤田が此方に流し田を送る。

「酷な事をなさる…。」

「…多分…表に真吾が居る。送らせてくれ。」

「本当に宜しいのですね？」「

「…ああ。」

藤田は、彼女を追つて行つた。

これでいいんだ…そう自分に言い聞かせ、ベッドに座り込む。先程迄、彼女が寝ていた温もりが残されている様な気がして、俺は布団に顔をうずめた。

彼女の残り香を、胸に吸い込む。

また、泣かせちました。

今は泣くかもしれない。でも、これが最後だ。

やがて彼女にも新しい生活が始まり、惚れた相手が出来、結婚して子供が出来て…平凡だが幸せな家庭を築くだろう。

そう、その隣に俺が居ないだけの話だ。

「真吾が、連れて帰りました。」

「そうか。」

「魂の脱け殻といつのは、ああいつのを言つてじょうね。」

「…。」

「何故、受け止めてやらなかつたんです。」

「蒸し返すな。俺は、彼女を幸せに出来ない。」

「幸せの形は、様々だと思いますが。」

「お前も、真吾と同じ様な事を言いやがる。…俺の親父は、本妻を持たねえ。ウチの本尊が弁天様で、本妻を持つとやきもちを妬くからつとうそぶいてるがな。芸妓を囮つて、妹達を生ませた。子供はいこわ。籍も世間体も西園寺の子供として認められる。だが、あの入達が日陰の身で苦労してる姿を、俺はずつと見てきたんだ…。彼女にあんな思いは、させられねえ…。」

人知れず涙していた女達の姿が思に出される。

「不自由なものですね。貴方達の世界も…。」

「諦めたつもりだったんだがなあ…今更ながら恨めしくなる。」

庭から、夏虫の声が聞こえる。

「市村の今後の事、どうされるのです?」

「この屋敷での奉公を望むなら、仕事が全て片付いた後に、もう一度男爵に頼んでみようと思つ。お前と真吾で、彼女の意思確認をしてもらえるか?」

「わかりました。」

「落ち着くまで、あそこに住まわせてやつてくれ。俺は、仕事が終わるまで帰れないからな。」

「会わないおつもりですか？」

「…そうだな。会えば、お互い辛いだけだ。」

「…。」

俺は、少し躊躇いながら藤田に聞いた。

「藤田…お前が、彼女を…。」

「止めて下さい！市村が、そんな事を望むはずが無い！」

「お前は、どうなんだ？」

「…。」

藤田は誠実な男だ。俺や真吾の様な、しがらみも無い。

「お前の親父さんと彼女も、浅からぬ付き合ひなんだ？？」

「どうして、それを！？」

「真吾が、気付いたんだよ。」

「俺は…父と同じ様に、ずっと市村を見守つてこいつもりです。」

「…そりか。」

「所長は、どうなさるのです？」

「俺か？俺は、そうだな…今迄通り、仕事に生きるが。先ずは、この仕事を解決しないとな。」

翌朝、彼女が居ない事で瑠嘉は「コネたが、彼女の身体の為に実家に戻つたと言うと、渋々納得した。

道場通いも興味を示し、今は屋敷内で基礎体力を養っている。

俺は、ポツカリと開いた胸の隙間を埋める様に、勢力的に動いた。環と共に社交場にも顔を出し、環の新しい相手として顔を売つて、様子を見ている。

鷹取とも会つて、言葉を交わした。

「で、印象は？」

「露骨に嫌な顔しやがった。何か陰湿な野郎だ。」

真吾と落ち合つた河原で、俺達は子供に混じつて石を投げていた。

「そりや、かつて社交界のミッドナイトブルーと言われたお前が相手じゃなあ。その日に落ちない女は、居なかつたからな。」

そう言つと、真吾は腹を抱えて笑つた。

確かに、女からの誘いは多かつた。手紙も、連日の様に舞い込み、それに絡む男からの果たし合いも、後を絶たなかつた。

皆、この目が珍しかつただけの事だ。

「堂本組の動きはあつたか？」

「今の所、とり立てては無いが、そろそろ焦つて来てるのは確かだな。それとな、堂本組の下つ端が、男爵の家のメイドと更に仲だそうだ。」

「相手は？」

「そこまでは、掴めねえ。藤田に探りを入れさせるか？」

「そうだな。」

「他に、俺に聞きたい事が有るんじゃねえか？」

「…。」

「結構、大変な事になつてんだけどな…。」

「どういう事だ？」

「まずな…あの後3日、桜は俺の腕の中で過ごした。」

「…」

「心配すんな。食つてねえよ。確かに、我慢するのは、かなり骨が折れただくな。」

とニヤリと笑つた。

「体調も戻つて無い上に誰かの酷な告白で、殆ど寝れない上に錯乱状態で、ずっと抱き締めて泣かせてたんだ。お陰で、俺の胸はビタビタよ。」

「…すまん。」

「4日目で、ようやく自分のベッドに寝てくれたんだがな…。」

「どうした？」「…」

急にトーンダウンした声に不安になる。

「次の朝、物凄い叫び声に、俺もキヨさんもビックリして桜の部屋に飛んで行くと、耳を押さえて叫び声上げてな…。」

「…で？」

「耳が聞こえないっていうんだ。」

「！」

「医者に診せても、原因が掴めねえ。多分、精神的な物だと言いやがった。」

「…。」

「その日一日中叫んで、血まで吐いて、次の日には声まで失つて…。そこまで来ると桜も諦めたんだろうな。部屋に籠もつてたんだがな。数日後、部屋に行つたキヨさんが今度は叫ぶんで、慌てて部屋に行くと、桜が床に這いつくばつて時計探してるんだよ。目の前に落ちてるのに、見えて無い…。」

俺は、その場に座り込んだ。

「流石にキヨさんも参つちまつてな。西園寺に連絡して、伊豆に行って貰つたぞ。」

「悪い…。」

「困つたのは、彼女の方だ。藤田と相談したら、藤田の親父さんが刀持つてやって来た。」

「刀？」

「凄かつたぞ！お前にも見せたかつた！」

「何があつた？」

「桜を庭に連れ出して、小太刀を持たせてな。『市村！刀を抜け！』って言つたら、桜の奴刀を抜いたんだ。桜が打ち込むのを、暫く受けたんだが、彼女の目が真剣になってきたのを見計らつた様に、一步下がつて刀を収めた。彼女が気を高めて打ち込んだ時、親父さん抜刀したんだ。トシ、俺凄いもん見ちまつた！」

身振り手振りで説明していた真吾は、興奮して言った。

「抜刀した刀を桜の喉元に突き付けて、『お前の迷いを、俺が今切つて捨てた』ってな。」

「…。」

「そしたら、彼女の目が見える様になつて、様子見てたら、多分耳も大丈夫だと思う。」

「声は？」

「いや…声はまだ駄目だ。喉の傷は治つて、医学的には問題無いらしいがな。でも、まあ焦つてもしようがねえ。」

「そうか…。」

第4章（7）

「彼女、藤田の親父さんの家に暫く預かって貰った。」

「そうか。」

「藤田の親父さんがあ、桜に約束してたのを聞いちゃった。絶対に自分から命を絶つ事を禁ずるってな。」

「…。」

「で、どうしても駄目な時には、自分が苦しまない様に、引導渡してやるってよ。」

「そう言つたのか？」

「ああ。武士が約束する時…金打つていうのか？桜と2人でしたいた。そうしたら桜、憑き物が落ちた顔して、やつと笑ったんだ。」

「やはり、ずっと…」

「ああ。考えてたんじゃないか？自分が引導渡してやるって…間違つてるのかもしだねえが、そういう愛し方もあるんだと思った。ある種、究極の愛の形だな。」

「…そうだな。だが、俺には出来ない。」

「俺にも無理だ。ありや、本物の武士だぜ。」

「旧幕軍の生き残りだそつだ。といつより多分、新撰組の…。」

「本当かよ！」

「ああ。」

「俺も、あの人の道場通おうかな…。」

彼女の身体に障害を残し、自害を考えさせ、他人に殺してもらう事で安堵する様な思いをさせて、本当にこの選択が正しい物だったと言えるのか？

だが、今の俺に何をしてやる事が出来る？

俺が出来るのは、この責めを一生背負つて行くしかない…。

「なあ、トシ。」

「ん?」

「お前、前みたいに、腹の中見せなくなつたな。」

「そりか?」

「桜の話、聞くのが辛ければ…。」

「いや、報告してくれ。全て…な。」

「俺…言つて無い事、1つあるぞ。」

「なんだ?」

「トシ、お前…桜の身体に…その、触れてやらなかつたのか?」「お前、何を…!」

「俺は思わず、真吾の胸ぐらを掴む。

「だから、食つて無いって。だけど、見ちまた…桜の肌をな…。」

「真吾を軽く突き飛ばし、俺は言つた。

「吉原でも行つて、記憶から消しちまえ…。」

「いや、ありや無理だろ?。あんな壮絶なもん、男でもそう居ねえ。」

「?」

「つひ若い娘が、じつやつたらあんな傷だらけの体になるんだ?」

「まだ、治つてないのか? 岩崎邸での傷が?」

「いや、違う。それは治つたと思つ。じやなくで、銃痕やら刀傷やらが、身体の至る所にあつてな…極めつけが、背中の袈裟懸けの傷。

「何だと?」

「かなりの深出だつたと思つぜ、あつや。」

「…。」

「そつこ…、瑠嘉が言つてたな…傷だらけだと…。」

「戦場でも行つてたつて事か? でも日露の頃は、14、5だろ? 日清の頃は、子供だしな。まさか、前世の傷をそのまま引き継いで生

まるるなんて事、ねえしなあ。」「

「…真吾、調べて欲しい事がある。」「

「何だ?」「

「桜の履歴だ。」「

「お前、何だつてそんなもん。」「

「良いから、調べてくれ。」「

「…わかった。」「

先の戦いで、女が戦場に向かうなんて有り得ない。
廃刀令が出たのは、俺が生まれる前…たしか明治5年だったはず。

じゃあ、その傷は何時?

彼女の言葉で、腑に落ちない点が多くあった。

俺が、彼女に離れる様に言ったのは、今回初めてだ。
しかし彼女は、過去にも俺が言ったと主張した。

興奮して支離滅裂になつてゐると思っていたが、それだけでは無い
のかも知れない。
彼女の過去に何があつたのか、改めて知らなければならぬ…そん
な気がした。

数日後。

男爵とサロンで談笑していると、外出していた環が入つて來た。
男爵は、黙つて席を立つ。

そんな事は一向に構わない様に、環は俺の隣に座り、俺のグラスを
取り上げて中の液体を飲み干した。

「何か、嫌な事でもありましたか?」

「どうもこうも、無いわ!貴方が一緒に行つて下さらないから、い
けないのよ!」

「どうなさいました?」「

「鷹取が、しつこいつたら無いのよ！貴方とどうこう関係かつて。」

「それは、それは……。」

「だから言つてやつたのよ。貴方が想像している通りの関係だつて……。」

「ほう。」

「そうしたら鷹取が、西園寺がどうなつても知らないぞつて脅すのよ。大丈夫かしら？ 鷹取は、善くない連中とも付き合つてるみたいだし、貴方が心配なの……私怖いわ。」

「そう言つと、しなだれ掛かる。そして、俺の顎を捉えると、「で、想像した様な関係に、貴方は何時なつて下さるのかしら？」と言つて、俺に口付けをした。ぼつりとした唇の感触と、侵入して来た舌の妙技に耐えながら、やつと唇を離した環の耳元で俺は囁く。

「俺は、あなたのものにはならないと、言つた筈だ。」

「だが、鷹取が仕掛けて来るなら、迎え打たせて貰うぜ。」
方眉を上げて唇を噛む環を残し、俺はソファーを立ち上がり言つた。

「何故なの……？」

今迄、籠絡出来なかつた男はいなかつたのだろう。悔しそうな環が睨み付ける。

「俺は、自分で女を選ぶ主義なんだ。」

新しい酒を注ぎ、環は一気に煽つた。

「あんたも、早く鷹取なんかと手を切る事だ。」

「……どういう事？」

「俺が、何にも知らないなんて、思つなよ。」

「ひつ！」

俺の矢の様な一警で、環はおのづく。

「このまま大人しくしていれば、あんたに手出しさしねえ。だが、お痛が過ぎると、身包み剥がされて、この屋敷からも社交界からも放り出されるぜ。環さんよ。」

「なんですか！」

と立ち上がり、怒りを表す環の耳元で、俺は囁く。

「男爵は、全てご存知だ。」

環の身体が硬直する。

ノックの音がして、藤田が入つて来た途端、

「わっ、私、先に休ませて頂くわ。」

と、バタバタとサロンを飛び出して行つた。

「薬が、効き過ぎかもせんよ。」

「構わやしねえさ。あー、けつたくそ悪りい！』

そう言つと、俺は酒で口の中を消毒した。

一昨日、俺は瑠嘉に頼まれ、剣の稽古に付き合つていた。

すっかり子供らしさを取り戻した瑠嘉は、藤田の道場に通うのを楽しみにしている。

東屋には、稽古後に召し上がって下さること、家政婦長が用意してくれた菓子や果実が置いてあつた。

そこに稔がやつて来て、菓子を食べ始めたのだ。

瑠嘉は、

「あー、稔。駄目だろ？ちやんと断つてから食べなことー。」
と、兄貴振る。

「本当に、食いしん坊なんだな。」

と俺が笑うと、

「稔は小さいから、人の物でも直ぐに食べちゃうんだ。でも、皆んな怒らないから、あつちこっちで盗み食いするんだよ。」

「人の物つて…例えば？」

「使用者の部屋の菓子とか、僕のおやつとか…一番取られてるのは、お祖父様のお茶菓子だね。」

「男爵の？」

「お祖父様は、きっとわざと稔に取られる様にしてあげるんだよ。」

お茶菓子だけ残して、稔が取れやすい所に置いてあつたりするもの。

「それを聞いた俺は、東屋に飛んで行つて、菓子を頬張つていた稔に聞いた。」

「稔、この間饅頭食つて、腹が痛くなつたよな？」

稔は、コクンと頷く。

「あの饅頭、何処から持つて來た？」

稔は、下を向いた。

「大事な事だ。何処かにあつた物を食べたのか？」

稔は、何も答えない。

「稔……」

「西園寺さん、駄目だよ。稔、怖がつてる。」

「瑠嘉、お前から聞いてくれないか？大切な事なんだ。」

「……わかった。稔、隠さずに西園寺さんに話して『』らん？」

「……怒らない？」

「ああ、怒つたりするものか。」

「ホント？」

「本當だ。そうだ、今度稔の好きな菓子を買つてこよ。」

顔を上げた稔は、満面の笑みになる。

「僕、カステイラがいい！」

「ああ、わかつた。」

「あれはね、お祖父様のお饅頭を貰つたんだ。」

「お祖父様、部屋にいらっしゃったの？」

「ううん。僕、お咲がお祖父様の部屋から出て來たから、きっとお菓子置いてつたと思ったの。お祖父様、いつも僕にくれるから、だから……。」

「置いてある饅頭を持つて出たんだな？」

「うん。」

「饅頭食べたのは、何処だ？」

「稔は、自分の部屋で食べたんだ。僕がすぐに見つけて、家政婦長

を呼んだんだ。」

そういう事だつたのか。

「瑠嘉、お前の部屋の水差しは、誰が変えるんだ？」

「えつ？色々だと思うけど……。」

「あの日、お前が倒れた日は？」

「わからない。」

「お咲だよ、きっと。」

稔が言う。

「見たのか？稔。」

ううんと被りを振つて、稔は続けた。

「でも、お咲はし�ょっちゅう、お兄様のお部屋に居るもの。」

俺は、瑠嘉を見る。被りを振る瑠嘉。

「僕、知らない。」

「お兄様の居ない時には、しじつちゅう居るよ。僕が、何しての
つて聞いたら、内緒だつて飴玉くれるんだ。」

「わかった、ありがとう二人共。」

そう言って、俺は藤田の元に急いだ。

原田咲は、藤田と俺に詰問されると、呆氣ない程すらすらと自供した。

恋人の堂本組構成員、時田洋次に言われ犯行に及んだ事。

饅頭は、環が買って来た事。

それ以上の情報は、広田咲からは引き出せ無かつた。

俺は、直ぐに橋警部に連絡し、広田咲の身柄を引き渡した。

そしてすぐに、時田洋次が逮捕され、事件背後に堂本組と鷹取が居る事が判明。

鷹取と堂本組は、男爵と瑠嘉を殺害し、環を通して大鳥家の財産を自分達のいい様にしようという計画だつたらしい。

きつと今頃は、鷹取の逮捕、堂本組の摘発が行われている頃だろう。

環が何処まで理解して関与していたかは分からぬが、男爵はこれ以上の犯行を犯さないのであれば、稔の為に許す氣でいるらしい。

「終わりましたね。」

「まあ、何とかな。」

「事務所には、いつ頃？」

「明日の夜には、退散出来るだろう。」

「了解しました。」

「藤田。」

「はい。」

「ご苦労だったな。」

藤田は、スッと頭を下げる。

第5章（1）

翌日、橘警部が報告の為に大鳥邸を訪れ、男爵に一部始終の報告を行つた。

鷹取は逮捕出来たが、堂本組組長他数名には逃走されたらしい。環にも近々事情聴取が行われるらしいが、当の本人は朝の内に小田原の別荘に行つてしまつた。

夕方、大鳥邸の面々に惜しまれつつ、橘警部と藤田と俺は退散した。

「西園寺君、本当にありがとうございました。でも堂本組には、気を付けてくれよ。奴等、相当いきり立つっていたそうだから。」

「わかつてゐるよ、橘警部。精々気を付けるさ。」

乗り合いタクシーが、事務所の近くに止まつていた車の後ろに停車し、俺達は車を降りた。

停車していた車を通り過ぎ様とした時、

「剛さん。」

と、後部座席から呼び止められた。

「母上…どうして、この様な場所に？」

中の女性は俺達に会釈をすると、

「桜さんの荷物を、取りに来たんですよ。それよりも…」

そう聞いて、俺は一人急いで事務所に向かつた。

事務所のドアを勢い込んで開けると、

「おう、お疲れさん。」

と、真吾が茶を啜つてゐる。

「…来てるのか？」

そう問う俺に、真吾は黙つて上を指差した。

どうしようも無く彼女に会いたい衝動と、会わずに行かせた方がいいという理性が葛藤し、足が動かない。

2階の部屋のドアが閉まる音がする。

廊下を歩く足音…。

階段の上に現れた彼女は、白地に黒いパイピングをあしらったワンピース姿で、旅行鞄と小太刀を持っていた。

階下の俺の姿に少し驚いた様だったが、ゆっくりと階段を下りて來た。

「元気にしていたか？」

今更ながら、間の抜けた挨拶をする。

彼女の身に起こった事を考えれば、元気も何もあつたもんじゃ無い。

それでも彼女は、「クンと頷いた。

彼女の憂いを含んだ目が、俺を捉える。

俺は、次の言葉が思い浮かばず、思わず彼女に近付こうとした。

「桜…俺は…」

その時、藤田と橋警部が、事務所に転がり込んで來た。

「西園寺君！ 堂本組の連中が！」

「所長！ 襲撃です！」

彼等の言葉が終わらぬ間に、銃声と共にドアの硝子が割れる。真吾は素早く棚より銃を出し、俺と藤田に投げて寄越す。

「お前は、裏から逃げろ！」

俺は、被りを振る桜を部屋の奥に向かわせ、銃を構えた。

「正当防衛だ！ 撃つて構わないぞ！」

橋警部の声が響く。

表から数人、入り込んで來たのがわかる。

その途端、激しい銃撃戦。

相手の1人は、被弾した様だ。

敵は弾が撃ち尽くされると、今度は合口を持って襲つて来る。

俺達は、事務所の其処此処に隠してある木刀等で応戦する。

その時、裏で銃声がした。

「しまつた！」

俺は、相手の眉間に一撃を『』えると、裏に行こうとした。
そこに、また新手が…。

「ちつ！」

焦る気持ちを抑えて、対峙する。

と、相手の体が、突然崩れ落ちた。

「！？」

其処には、血で濡れた小太刀を握る桜が立っていた。

「大丈夫か！」

と問う俺の言葉に、彼女は黙つて頷く。

「お前は、此処に居ろ！動くなよ！」

そう、桜を部屋の隅に誘導した。

その時、新たな銃声と共に、一際大きな男が現れた。

片手に銃を持ち、片手で長物を肩に担ぎ、ギラギラとした目で事務所を見わたして叫ぶ。

「西園寺い！！」

「堂本だな？」

「何度も何度も俺達の邪魔しやがって！お前えだけは、許せねえ！」

「！」

そう言うと、銃を撃ち放つ。

ギリギリでかわしながら、家具の間をすり抜けた。

堂本の背後から、真吾が一撃を見舞った。

その一撃を身に受けてなお、長物を持った手で、堂本は真吾を殴り飛ばした。

真吾の体が、家具と共に部屋の隅まで飛ぶ。

「真吾！」

藤田が、残党を片付けながら叫ぶ。

「この野郎っ！」

俺は、木刀で堂本に向かうが、奴の桁外れな力に押されてしまつ。隙を見て、決まつたかと思つた途端、奴の蹴りをまともに食らひ、

壁に激突する。

「がはつ！」

胃が裏返る様な衝撃。

そのまま奴は俺の側まで来ると、
「いい格好だなあ。」

と、笑う。

口から流れる血を拭い、立ち上がるとする俺を上から見下ろし、
「お前は、そのままジッとして、この現状を見ておけ。
そう言つと、銃を取り出し、俺の太ももを撃ち抜いた。

「がつ！..」

太ももが火のついた様に熱い。

「キヤー——ツ！！」

と言つ叫び声と共に、桜が俺に飛びつく。

「おっ、西園寺。お安くねえなあ。お前の、スケカ？」

「桜、下がつてろ！」

「おお、いいねえ。そんな姿で、女を守れるのか？」

そう、下品た笑いを浮かべる。

「お前の田の前で、この女を慰み物にするつてのも、いいよなあ？」

「てめえ！」

「いいねえ、その顔。」

俺に抱きついていた桜が、スッと立ち上がり、堂本に向かつて小太刀を構える。

「やめろ！ 桜！ お前のかなう相手じゃない！」

俺は、叫んだ！

それでも、桜は構えを解かない。

「俺とやろうつてのかい？ お嬢ちゃん？」

堂本は、ニヤニヤ笑つて長物を手の中で回す。

「貴方の相手は、私がします。」

桜は、低いがしつかりした声で言い放った。

「面白れえ、気に入った！ 受けてやるよ。」

そう言つと、堂本も長物を構える。

「やめろ！ 桜！ 藤田、止めてくれ！」

「おつと、邪魔しないでもらいてえな。」

そう言つと、横から打ち込んで来る藤田を、難無く力でねじ込む。しかし桜に向かつては、力を使う事無く、刀を合わせ傷を付ける事を楽しんでいる。

「いいねえ、西園寺！ お前のスケは、最高だせ！』

そう言いながら、桜の身体を切り刻む。

かなりの出血と疲労で、桜の剣先は震え、肩で息をする状態だが、それでも彼女は構えを解かない。

「てめえ！ いい加減にしやがれ！」

木刀を使って立ち上がった俺は、何とか一打打ち込むが、今度は肺腑に一撃をみまわれ、息が出来ない。

「お前は、そこで見てろと言つたろう？」

倒れても何度も立ち向かう藤田と、白いワンピースを真っ赤に染めて立ち向かう彼女を、霞む目で見るしか無いのか？

その時、

「其処までだ！ 堂本！」

警官隊が突入し、堂本の背後から銃で狙いを定める。

「武器を捨てろ！ 堂本！」

しかし堂本は、上段の構えのまま俺に近付いた。

桜が、間に割つてに入る。

堂本は、不適な笑みを浮かべると、

「お嬢ちゃん、俺の心臓、貫いてみろよ。」

「！？」

間合いを取つている桜に向かい、再び挑発する。

「ほら、でないと、俺はあなたの大事な人を斬つちまつぜ。」

一瞬の躊躇。

桜は、小太刀の構えを解いた。

「…賢いな、お嬢ちゃん。」

後ろでは、引き続き警官隊が警笛を発していた。

「西園寺っ！」

そう堂本が叫ぶのと同時に、発砲される。

1発、2発…堂本は、倒れない。

4発、5発…上段の構えのまま、堂本の身体がゆらりと傾き、一步近付いた瞬間、桜が俺に覆い被る様に抱きついていた。

堂本の身体が倒れるのと同時に、

「桜！」

「市村！」

と、真吾と藤田の叫び声が聞こえる。

「…」「無事…ですか？」

「桜？」

「良かつた…。」

そう、微笑みながら崩れ落ちる彼女を支えようと背中に手を回した俺は、彼女の背中が切り裂かれ、大量の血が溢れ出しているのを感じた。

雷が身体を駆け巡る。

「さくらあーーっ！！」

彼女を抱きかかえ、力の限り呼び続ける。

「今、救急隊が来ます！」

「マズいぞ、トシ。出血が酷い。」

「しつかりしる、桜！」

俺達が口々に叫ぶ中、1人の男性が近付いて來た。

「父上！」

藤田が驚く。

藤田の親父さんは、黙つて桜の身体を抱ぐと

「市村、分かるか？」「

と声を掛ける。

桜は、荒い息の中頷いた。

「お前の身体では、もう保つまい。お前が望むなら、俺が引導を渡

してやるつ。」

桜は、微かに微笑んだ。

「止めて下さい！父上！」

「親父さん、それはいけねえ！」

俺の身体の血が逆流する。

桜の小太刀を拾い上げ、今正に彼女の心臓に当たられる瞬間、俺は叫んでいた。

「やめろ！！斎藤！！お前が桜の命を絶つなんて、この俺が許され！副長命令だ！！」

その瞬間、藤田の親父さんの身体がビクリと痙攣し、小太刀を置いて頭を下げた。

そして、

「喜べ、市村。お戻りになられたぞ。お前は、生きなければならぬ。分かるな？」

と、桜に言った。

桜は、親父さんの手を握つて、涙を流す。

「お願いします。」

そう言つて、彼女の身体を俺に渡して、藤田の親父さんは去つて行つた。

程なく来た救急隊の車で、俺達は桜を病院に運んだ。
手術室の片隅で、俺は自分の太ももの治療を受けていた。
弾は貫通しており、消毒だけをして貰つ。

「あなたも縫わなきゃならんが、まずこのお嬢さんだ。」

そう言いながら、医者は彼女の体を拭きはじめた。

「先生、患者さんですが、麻酔が効きません。」

「濃度は？」

「最大ですが、意識を保つたままで。」

「マズいな……。」

「手術出来ないのか？」

「傷を診たところ、縫うだけで済みそうだが、麻酔無しではかなりの苦痛を伴う。それに、動かると縫えないぞ。」

「押さえ付ける人手なら有るが。」

「そんな簡単な話じゃない！麻酔無しでは、拷問も同じだ。精神が崩壊する危険もあるんだぞ！」

「…それでも…。」

「出血もかなり酷い。しかも彼女は女性だ。とても耐えられんだろう。」

「先生、それでも頼む！手術してくれ！」

「私には…責任が持てない。」

「責任は、全て俺が持つ。彼女の痛みも、精神が崩壊しても。」

「…見ている方も辛いぞ。」

「分かっている。」

「…承知した。押さえ付ける者を呼びなさい。」

俺は事情を話し、真吾と藤田に手術室に入つて貰う。真吾は足を、藤田に左腕と左肩を、俺は右腕と右肩をそれぞれ押さえる。

「手拭いを噛ませてやりなさい。」

桜の口に手拭いを噛ませると、俺は彼女の耳元で囁いた。

「済まない、桜。耐えてくれ、俺の為に。」

彼女が頷く。

「それでは、行くぞ。」

そう言つて医者は傷を消毒し始めた。

第5章（2）

彼女の口からぐぐもつた叫び声が発せられ、俺達を跳ね飛ばし体を反らせる。

「ちゃんと押さえろ！縫う時は、こんな物では無いぞ！」

医者の怒号が響く。

俺達は、氣合を入れ彼女を押さえ付けた。

彼女は、一針縫う毎に呻き、玉の汗を流し、喘いだ。

俺達は、押さえ付けながら彼女を励ました。

「氣い失つちまつた方が、楽だろうに…。」

「それは、無理だな。痛みで引き戻される。終わる迄、地獄の苦しみだ。」

「地獄の苦しみの後には、天国が来るんだよな？トシ。」

「…そうだな。」

「聞いたか？桜！お前、また事務所で一緒に働くぞー。」

「それは…！」

「所長、市村は、我々と一緒に事務所に居る事が幸せだと、俺も思います。」

「変わったお嬢さんだ。こんな傷だらけになる職場、私だったら願い下げだがね。」

医者は、一針一針縫いながら言った。

「ほら、桜に約束してやれよ、トシー。」

「所長！」

「あ…」

そう言つと、俺は彼女の耳元で囁いた。

「お前の居場所は、俺達の…いや、俺の所だ。戻つて来い、桜。もう、何処にも行かせねえ。」

痛みに耐える彼女の右手が、俺の手を握り返した。

彼女は3時間激痛に耐え、そのまま昏睡状態に陥った。

「先生…。」

「後は、彼女の気力と体力の問題だが、先程話した精神的な問題は、正直彼女が目覚めてみないと、何とも言えんな。」

「そうですか…。」

「それより、君の足の傷も縫つてしまおう。その方が治りが早いからね。」

「先生、俺も…。」

「麻酔無しで縫つてくれなんて、言わないでくれよ。あんな事は、もう懲り懲りだからな！」

「…わかりました。」

俺が麻酔から覚めると、枕元で真吾が大いびきで寝ていた。

「…うるさいぞ、真吾…。」

その声を聞き、藤田が覗き込んだ。

「お目覚めですか？所長。」

「ああ、良く寝た気がする…。」

「半日、寝ておられました。」

「そうか…お前達も、帰つて休んでくれ。俺はもう大丈夫だ。」

藤田は、ちらりと真吾を見て、

「そうさせて頂きます。事務所も片付けなければなりませんし。」
と言つた。

「ああ、悪いが頼む。…彼女は？」

「此方に…。」

と、藤田がカーテンを開けると、隣のベッドに桜が寝ていた。

「医者から、モルヒネを投与するか、相談がありました。」

「モルヒネか…量は？」

「市村の場合、かなりの量を入れないと効果は無いとの事です。」

「

「だが、常習性が残ると？」

「はい。」

「…苦しいだろうが、止めさせるべきだろうな。」

「彼女には酷ですが、俺もそう思います。」

「わかった、その件は俺から話しておく。」

藤田が真吾を連れ帰った後、俺はベッドから起き桜の枕元に座った。うつ伏せになつた彼女は、息が荒く玉の様な汗をかいていた。傷の為に熱が出ているのだろう、俺は濡れた手拭いで顔や身体を拭いてやる。

全く無茶ばかりしやがる。

まあ、お前の無茶は、今に始まつた事じやない。

最初は、俺の周りをチヨロチヨロしていただけだつたのに、何時の間にか俺の心に住み着きやがつた。

殺伐とした日々の中、お前の笑顔が俺の、俺達の心の安らぎだつたな。

あの頃、流山で近藤さんを失つて、宇都宮の戦いで俺が無茶をしたばかりに、お前の背中に最初の傷を作つちました。

あの時も、足を負傷した俺を庇つたんだつたな。

俺が療養から会津の前線に戻る時、お前を離しこそや良かったんだ。だが、近藤さんを失つて、俺はどうしようもない心の渴きを、お前の存在で満たさなければ、前に進めなかつた。

白河、会津、仙台そして蝦夷まで、お前は歯を食いしばつて付いて來た。

蝦夷で、流石に先が無いと思つた時、鉄之助と一緒に落ちさせられつもりだつたんだ。

蝦夷の遅い桜の時期だつたな。
窓を開けると、満開の桜が咲き乱れ、部屋の中にも桜の花びらが舞い込んでいた。

お前は、泣いて泣いて…一晩中俺は抱き締めて、来世で必ず一緒に
なろうと約束し、俺の小太刀、堀川国広を与えて金打を打つた。
決戦最後の朝、鉄之助と共に落ちたと思っていたお前が現れた時に
は、正直驚いた。

あの朝の俺の覚悟を、お前は直ぐに見抜いて、背を向けて時計を巻
く俺の背中に抱き付くと、帰りを待っていると言った。
だが俺は、お前の言葉に何も返してやる事が出来なかつた。
一本木関門で俺の腹に風穴が空いた時、俺は自分の思い通りに生き
た、良い人生だつたと思ったんだ。

心残りは、あそこに残したお前を、また泣かせちまう事だけだつた
…。

夏の終わり、俺達は事務所に帰つて來た。
秋が深まつても、彼女の意識は戻らない。

正確には、起きて生活出来る様になつっていた。
だが、意識が飛んでしまつていた。

何を見ている訳でも無く、何を話す事も無く、ただ幼女の様に、俺
の姿だけを追つていた。

「入るぞ、トシ。」

そう言つてズカズカ入つて來た真吾は、俺達の姿を見て呆れた様に
「また、抱いて寝てたのか？」

と、溜め息をつく。

ベッドに横たわる俺の胸には、桜が寝息を立てていた。

「ひつやつてないと、落ち着かないんだ。」

昼間は、俺が見える所に居るだけで安心する様になつたが、夜にな
ると俺を探し回り、おれの懷に入り込む。

1人で寝かせると、一晩中震えて翌朝には錯乱状態になる。
あまりに率直な感情に最初戸惑つたが、今では同じ部屋で過ごす様
にしていた。

「しかし、これがあの桜かと思つぜ。」

真吾がニヤリと笑う。

「確かに、意識が戻つたら、絶対に見せてくれない姿だな？無意識つてなあ、恐ろしいもんだ。」

俺は、桜の髪を撫でながら言った。

「お前、楽しんでないか？」

「ああ、こんなに率直に俺を求める事なんぞ、今だけだらうからな。恋人と娘を、同時に持つた気分だ。」

「…本当の意味で、抱いてやつて無いんだろう？」

「馬鹿やろう。俺は、幼女をいたぶる趣味はねえよ。それに、こいつには待たせちまつたからなあ。今度は、俺が待つ番だと思つてな。」

「はっ！とんだマゾ野郎だぜ！」

「ぬかせつ！」

と、2人して笑い合つ。

真吾に頼んだ彼女の調査は、正直驚くものだった。

調査出来たものだけで10件の屋敷で、短期間の奉公を続けていた。記憶が戻つた今となつては、意味の無い調査を、俺は打ち切らせた。真吾は、例の魔女伝説は、実は桜なのではないかと、瞳を輝かせて興奮していた。

もしかしたら、伊豆に居た姉やも、彼女かもしれない…。

「で、どうなんだ？意識の方は？」

「時々、目の奥で、何か光る時がある…。以前に比べると、少し笑う様にもなつて来た。」

「そうか、少しずつ前進してるならいいんだ。」

「ああ、お前達にも負担を掛けるな。」

「なあに、藤田だつて心得てる。心配するな。」

その時、

「……ん……」

桜が目覚めそうだった。

「トシ、ちょっと俺と代われ。」

そう言つと、真吾は俺をベッドから引きずり出し、桜の隣に寝そべつて、その身体を抱いてやる。

こいつは、昔からこんな悪戯が好きだ。

やがて、目を開けた桜に、

「おはよう、お姫様。今、お目覚めかい?」

と、聞いた。

しばらくくじつと真吾の顔を見ていた桜の目こみるみる涙が溢れる。

「わっ、わ、悪かったって!【冗談だから】」

「幼女に【冗談なんか、通じるか。馬鹿。】

そういうと、俺は桜に顔を見せた。

「悪かったな、桜。俺は、ここに居る。」

俺の顔を見る桜の目に、チカチカと光が見えた。

俺が、そつと抱いてやると、その胸に飛び込み、声を上げて泣き出した。

「わっわっ、どうしたらいい?」

と、慌てふためく真吾。

確かに、今迄声を上げて泣くなど、激しい反応はしなかつた。

「確かに、いい刺激にはなったみたいだな。」

「大丈夫なのか?」

「ああ、2人してくれるか?」

真吾は、そつと部屋を出た。

なおも声を上げて泣きじゃくる桜の耳元で、俺は囁き続ける。

「桜、桜、落ち着け。あれは真吾だろ?」

「……」

「タベから、お前の側にずっといたのは俺だから、心配するな。」

少しずつ声が小さくなる。

「愛してる、桜、ずっと一緒に…愛してる。」

これまで何百回と言つてきた呪文。

この言葉が一番桜を落ち着かせるのを、俺は知つている。

「…」

泣き止んだ桜が、じっと俺を見つめる。

俺を見上げる毎に、焦点を合わせようとする。

俺は、彼女の唇を覆つた。

差し込んだ舌に、彼女が答えた。

「！」

俺の腕に力が入る。

唇を離し、彼女の耳元で囁く。

「桜、桜、目覚めたのか？」

「…ひ…じ…西園…寺…さ…ん…。」

「桜つ…！」

俺達は、長い長い別離の時を埋める様に、唇を重ねた。

2人揃つて事務所に出た俺達を、真吾と藤田はとても喜んでくれた。

真吾は、俺の判断が正しかったと彼女を抱き上げた。

藤田は、流れる涙を隠そうともせず、喜んでくれた。

久々に彼女に淹れてもらった日本茶を啜りながら、思い出話しが次々と後を絶たない。

「市村、我が家で話した事を覚えているか？」

「はい。」

「あの時、父はお前を守れ、死なせるなと言つた。あの時俺は、誰か敵から守るのだと信じ込んでいたが…。」

「…。」

「あれは、お前自身から、お前の命を守れという事だつたのだな？」

「宇都宮で私が負傷した後、斎藤さんにお会いした時、酷く叱られ

ました。もし、私が死んでしまつたら、副長がどんな思いをなさるか考え無かつたのかと。私は答えました。命を懸けて守りたいものがあるなら、私は自分の命を獻わないと。」

「…やはりな。」

「とても叱られましたけど、斎藤さんは黙つて下さいました。自分が側に居る限りは、副長の為にお前の命を守つてやると…。」

「…。」

「藤田さん、あつがといひぞおこます。」

「いや…。」

「それは、藤田がトシと桜の為に、頑張つたつて事だよな。」
と、真吾が藤田の背中をバシバシ叩いて叫びつ。

「…ああ。」

藤田は、照れくわいひに鼻の頭を搔いた。

第5章（3）

夜も更けて、真吾と藤田は、2人して夜の街へ出掛け行つた。
氣を使いやがつて…。

「それでは、私も休ませて頂きます。」

そう言つて、桜は以前使つていた密間に戻ろうとする。

「…何処に行くつもりだ？」

廊下にもたれ、腕を組んだまま俺は彼女に尋ねた。

キヨトンとした桜が密間を開けると、其処は物置と化していた。
「えつ？あの…。」

「お前の部屋は、此処だ。」

俺は、自分の部屋のドアを開ける。

「でも、其処は所長の…。」

「だから…」

俺は桜の身体を抱き上げ、自分の部屋に入りベッドに座らせる。

「俺達は、ずっと一緒に部屋で生活してんだよ。」

彼女は、耳まで赤くなりながら、身をすくめて小さな声で言つた。

「あ…でも、私、もう治りましたし…。」

そう言つて立ち上がる桜の手を捕まえる。

「…もう離さねえ。」

引き戻し、俺の腕の中に捕らえる。

身体を硬くする桜の耳元に、

「俺は、もう…待つ氣はねえからな。」

と言つて押し倒す。

「でも、真吾さん達が…」

「帰つて来ねえよ。今夜はな…。」

そう言いながら、彼女の帯を解く。

どうすればいいか、震える彼女の耳元で、

「…嫌か？」

と尋ねると、彼女は振りを振った。

「…桜…。」

俺は彼女の耳朵を噛み、首筋に肩に、唇を這わせた。

秋の月が、彼女の肌を青白く照らす。

小刻みに震える身体が、彼女の喘ぎが愛しい。

「桜…愛してる。」

何度も何度も呟きながら、俺は彼女を自分のものにした。

また春が巡つて來た。

うららかな日差しが差し込む様になつたある日、大鳥邸から使いの車がやって來た。

御前が、私と所長を邸に招きたいとの仰せだった。

私の胸は、チリチリと痛む。

御前とお会いするという事は、あの人の話になるという事。

御前はそれを、所長の前で話すというのか？

躊躇う私に、煙草をくゆらせ思案顔で聞いていた所長が声を掛ける。
「…わかった、伺おう。おい、出掛ける用意をして來い。」
「はっ、はい。」

車に乗り込んで、所長は一言も話さず口を開じていた。
ただ降りる間際、緊張する私の手を握り、

「俺は、大丈夫だ。お前が、気にする必要なんぞねえよ。」

そう言いつと、少しばかんだけ様に笑ってくれた。

書斎に通された私達を、御前が歩み寄り包容する。

椅子を勧めながら、

「ここからが、一番の眺めなんだよ。」

そう言って、庭の桜に目を細める。

「立派な桜ですね。」

「山桜なんだよ。この季節は函館を思い出して、ここで散つて逝つた友と酒を酌み交わすんだ。彼は、あまり強くなかったがね。」

「そうでしたね…。」

互いに、はらはらと散る花びらを見て、じばりく感慨に浸る。

「私は…」

沈黙を破つたのは、御前だった。

「…ずっと君に済まないと思つていたんだ…。」

固く握られ手に目を落とし、御前は続けた。

「あの時…彼が亡くなつて、小芝君が五稜郭まで遺体を運んで来た時の…君の叫びが…忘れられんのだよ。」

その刹那、あの時の情景がありありと思いだされる。

飛び交う砲弾と銃弾。

硝煙と土煙の匂い。

私は参謀本部の片隅で、彼の被弾、戦死の報を聞いた。

頭が真っ白になつて、その場に崩れ落ちた私は、そこから耳を塞いでしゃがみこんだ。

不意に肩を掴まれ、彼の遺体が運ばれて來たと大鳥さんが知らせに来て、転がる様に部屋から走り出した。

床に敷かれた白い布の上に横たえられた彼は、苦しまなかつたのだろうか、寝ている様にしか見えなかつた。

しかし、腹の銃痕からの出血は酷く…私は、既に動く事のなくなつた彼の体に、傍目も気にせず取り縋つて泣いた。

「あの時…君は『大鳥さん、私も撃ち殺して下さい』…彼の元に、逝

かせて……』と彼に取り縋つて泣いて…

ああ、そうだ…この人を、実はとても寂しがり屋なこの人を、一人では逝かせられないと…あの時の私には、その思いしか無かつた。

溢れる涙を拭いもせず、私は桜を見ていた。

いつしか私も、両手が白くなる程固く握り締めていた。
隣から、そつと添えてくれる手が温かい。

「私はあの朝、彼と約束していた。もしもの時には、君を必ず落ち延びさせてると…あの時の私には、その約束を果たす事で頭が一杯で、君自身を思いやる余裕は無かつたんだ…。」

「しかたがありません。そういう状況でしたから…。」

「…彼の…時計は、今も持っているのかね？」

御前が、顔の下で組んでいた手から、少し目を上げて私を見る。
私は、上着のボタンを外し、懐に入っている懐中時計を取り出した。

「やはり、持っていたんだね…」

「そんなことを言っちゃいけない！君は、ここから直ぐに脱出するんだ！」

「嫌です！！後生だから、彼と共に逝かせて下さい…！」

「だめだ！僕は、彼と約束したんだ！君を必ず落ち延びさせると…揉み合う私達の足元に、彼の懷にあつた懐中時計が転がつた。

合理的な一面を持つ、彼の愛用の品。

銃弾が掠めたのか、本体がへこんでいる時計を拾い上げて撫でる蓋を開けると、硝子にヒビが走り、時計は動かなくなっていた。

朝、彼は何時もの様に竜頭を巻いていた。

私は、食い入る様に文字盤を見る。

手が震え、涙で霞む…彼が、天に召された時間…。

「怨みますよ、大鳥さん！」

「なつ…！」

ピクリとも動かなくなつた時計を握り締め、私は言い放つた。

「あの人居なくなつたら、私の時間も止まつたままなんですっ！」

「！」

「あの時…君は、自分自身に趣を掛けたんだね…」

「…そんなつもりは毛頭ありませんが、確かにあの時から、私の中の時間は止まつてしましました。」

「それだけ、彼との結び付きが強かつたんだな…深い所で…。」

表を、春の風が吹き抜ける音が聞こえ、一斉に花びらが舞い上がる。「あの後、君が彼の時計だけを持つて姿を消してしまい、直に我々も投降せざるを得なくなり、私はどうして君を…君の希望を聞き届けてやれなかつたのかと、あれは私のエゴイズムでしか無かつたのではないかと後悔したよ。自ら命を断つ様な事になつたのではないか？官軍に捕らえられ酷い目に遭つたのではないか？彼との約束を果たせなかつたから、余計に思ひは募つた…。」

「大鳥さん…。」

「一年前、あの頃のままの姿の君に再会して、その思いを新たにしたのだ。君の40年という月日には、私はどう報いからいい？その事を、ずっと考えていたのだ。」

「確かに、絶望した事もあります。正直、自害しようとした事も。でも、思い直したんです。私は彼と金打を打つて約束しました。来世で必ず一緒になろうと。ならば、出会えない筈は無いと。」

「やはり君は、あの頃と少しも変わっていないのだな…一途で、たおやかで、とても強い。」

「ありがとうございます。」「

「今は…幸せなのだね?」

「はい…やつと出会える事が出来ましたから。それだけで、十分で

す。」

肩越しに微笑みを向けると、当たり前だといつ様に見つめ返す瞳がある。

「そうか…。」

そう呟いて、御前は席を立ち、大きな机に向かった。

「今日は、君に渡したい物があるのでよ。」

そう言うと、机から小さな小箱を取り出した。

「ずっと迷っていたのだがね。やはり、これを君に渡さなければいけないと思い直したのだ。開けてみなさい。」

少し古ぼけた、掌に乗る程の箱を開けると、中から女性用の懐中時計が出てきた。

銀の透かし彫りになつた蓋の柄には、桜があしらわれていた。

「これは…?」

「この時計は、彼から君への贈り物だよ。」

「!?

「彼が懇意にしていたロシア商船の艦長が、生前彼から依頼された物だそうだ。あれから恩赦で放免され、仕事で北海道に赴任していた時、艦長が私を訪ねて来てね…。」

その時、隣の席から大きなため息があり

「やつと出来上がつて来たのか…。」

「所長?」

懐中時計を手に取りながら眺めると、

「いい出来じゃねえか。俺が図案を考え、ザレコフに頼んだんだよ。ロシアの時計職人に作つてもらつ様につてな。」

「え、君は本当に…?」

御前は、大きく目を見開いて、両手をかざす。

「ああ、大鳥さん。苦労かけちまつたな。」

彼等は、その手をしっかりと握り、友情を確かめ合つた。

「彼女が認めだのだ、疑つていた訳ではないが……それでも、記憶も引き継がれているのかね？」

「ああ、全てといつ訳では無いが、ふとした拍子に蘇る……特に、こいつと関わつて以降の記憶は、鮮明にな。」

そう言つと、まるで悪戯つ子の様に肩をすくめて笑つた。

「ああ、私はこの歳で懐かしい友との再会を果たせたのだな。」

大鳥さんの頬に涙が光る。

「ああ、浴びる程酒を酌み交わす約束も、果たしちゃいねえしな。俺は、そんなに弱え訳じゃ無いんだぜ。」

「そうだった、そうだった。善は急げだ、すぐに酒の用意をさせよう！」

大鳥さんは嬉しくて仕様がないといつ風に、顔を上気させて書斎を出て行つた。

私は、掌に懐中時計を乗せてみる。

少し小振りで、纖細な作り。

「素敵ですね。」

「だろ？色々考えたんだ。お前に似合つた物を持たせてやりたくてな……。」

「ありがとうございます。」

「少し、外に出るか……。」

彼はそう言つて、書斎から庭に出る扉を開いた。

いつの間にか陽が傾き、茜色の空に桜が溶ける。

「その時計をお前に贈ろうと考えた時、俺は未来を思い描いた。笑つちまうだろ？先のねえ戦だと分かつてはいたんだがな、あの戦が終わつた後の、お前との未来を……希望を考えると、戦う勇気が湧いて來た。」

私は、時計を握り締めて聞いていた。

「全てが終わる頃、戦も仲間達の事も全てが終わる頃、その時計は出来上がつて俺の元に届く筈だった。そして、お前に渡してやれる筈だった。」

戦の中で死ぬ事が侍としての本懐だと、公然と話すことをばからなかつた彼が、あの時その先の未来を考えていってくれていた。

私との未来を…。

私は、怖かった。

彼が私を残して死んでしまつてもいいと考えている事が…。

私はずっと、その思いに捕らわれていた…この40年、ずっと…。

「貸してみな。」

私は、時計を彼に渡す。

「これからは、この時計が俺とお前の未来を刻むんだ。」

そう言つと、彼は時計の竜頭を巻いて、私の手に戻した。

ボタンを押すと、透かし彫りの蓋が跳ね上がり、文字盤に秒針が時を刻む。

彼の腕が柔らかく私に回され、その中に私は捕らえられる。

「待たせたな…。」

私は、彼の胸に顔をうずめ、被りを振つた。

「俺が、二人分お前を幸せにしてやる。お前は、俺の腕の中にずっといる。いいな？」

耳元で囁かれる声に、また熱い涙が溢れる。

彼の腕に力が込められ、彼の鼓動が、私の鼓動に重なる。

そして、時を刻む音が…私の刻が動き始める…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6054m/>

桜の刻

2010年10月8日16時12分発行